俳人百家撰

全

和二十二

# 俳人百家撰

雄齋國輝圖

綠亭川柳輯

嘉永七甲寅歳
東都甘家書肆

キラク



史俤社の名八古今和歌集の序を出て世こぶ風骨法こと
世を注連くち守武宗鑑を初
宗因よ談林の一派をひらき芭蕉
より貴きも談きも俤を学ばざる
古今の数をあらねど皆好
好し自己格しその面類の世情をうつし
社吟松島の秋乃ことぶきの松のねもごろよ世よ俤
集話するやそこの中よ手法
補これ枝葉集て書妻の狩
ねぐら品吉を出のぶんて逸よ俤人る様ら
このりてあどふ仏ふも宗匠
書物の求よ志ぶ品書者の眼
て出ひとまり私んにしとはぶろ

嘉永八卯社重春

綠亭川柳

芭蕉庵の旧地へ
深川大間堀要津
寺周所長慶寺ゟ
古墳あり云伝頂
禅師現住の地ゟて
翁由縁の寺ゟり
古池の吟ハ今の
松平遠州侯の庭中
ゟ存せる池ありとの
辺ゟ昔庵の在ゟ
ゟ句ゟり延宝の末
桃青伊賀の上野
を出て江戸ゟ下り
鯉屋杉風家ゟ入
後ハ雑髪して素宜と
改又杉風ゟり芭
蕉庵の号ゟ譲請
て夫ゟりのち彼地ゟ
庵を結ぶ此古池へ
原杉風が鄰ゟて
ありしぞ

古池や　芭蕉翁
蛙飛こむ
水の音

應需
三亥猪景

# 俳諧古哲

芭蕉十哲
蕪村筆意

去來

許六

北枝

支考

其角
丈草

嵐雪

野坡

越人

曾良

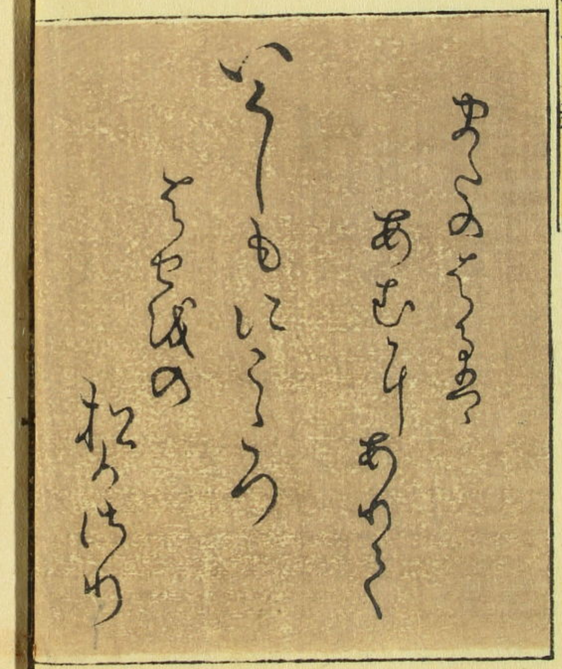
文化十四年の冬、桐葉の門輩の酒わの
ふるまひて家族つどひそと言
ふ。万葉まきの古語の侍
保川の水をせんじ入て楠
田せこいふかるるき梅も
ちりおそとよみ又ちる人
のこころもいかぬめりといふ高
きの句を残して又あら板の
と筆を新居のかべ
弟と俳諧めきはし
なくそれぜくまおろ
ぎりく山の紫ろう越
文政十一年春三月廿
日の夜
桐葉
とうえん

樂翁侯

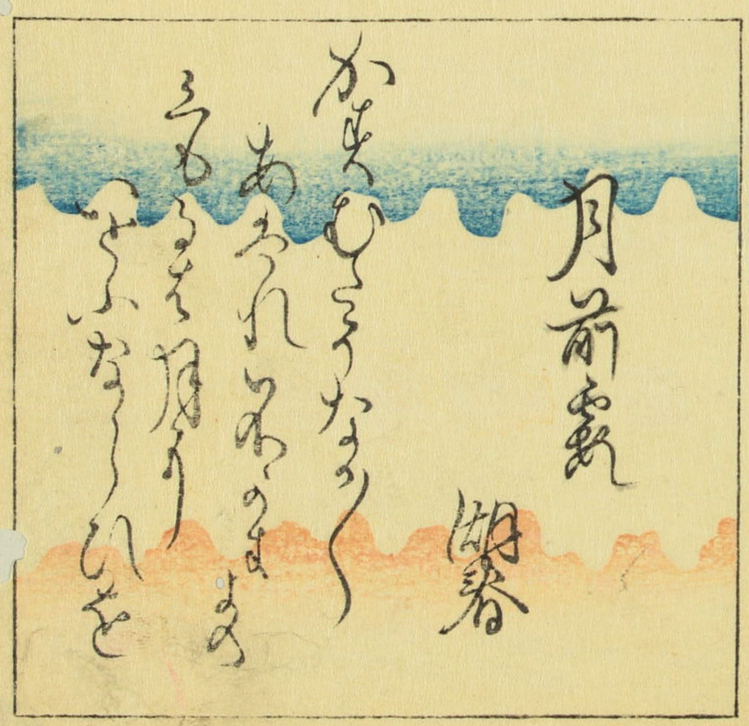
よのひとの
勇あり
生れさぬ
仁あり
春たてば
あらたまの
年ぞ
寒山子

古筆手鑑

芭蕉翁



北村湖春



月前雲

湖春

## 俳古の發句の体

ちる花を
[illegible]

## 職人盡發句鏡

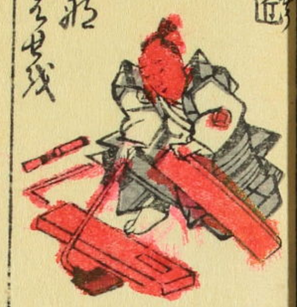
番匠
[illegible]

幣ふり
[illegible]

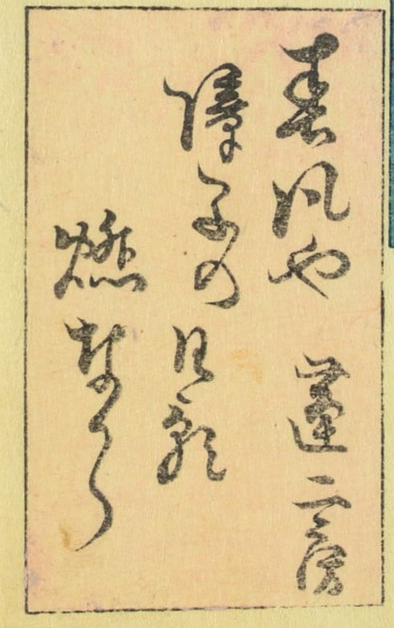
鍛冶師
[illegible]

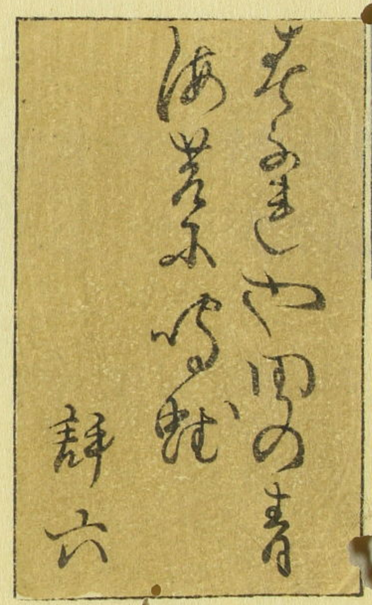
一笑

立甫









笠縫
雪折や
むかしも
かゝる
笑のもり
松意

傘
かさそろへ
眺り
胡蝶の
やどりかな
重五

栗田焼
青菜の
かんり
日ぐれつ
井戸茶碗
一茅

鍛冶
吹しき
野うぢの
あらくぬ
柳かな
春分

酒造
利牛
あら〳〵こめて
風ふく
なつのさ
かな

紙すき
ある程の
あろ〳〵ぞ
紙よ
その女



宝晋斎

大高氏

山をぬく
松もて
松の
子葉

松住素園

ものぬひ
縫物や きもせで よごさぬ 五月雨 羽紅

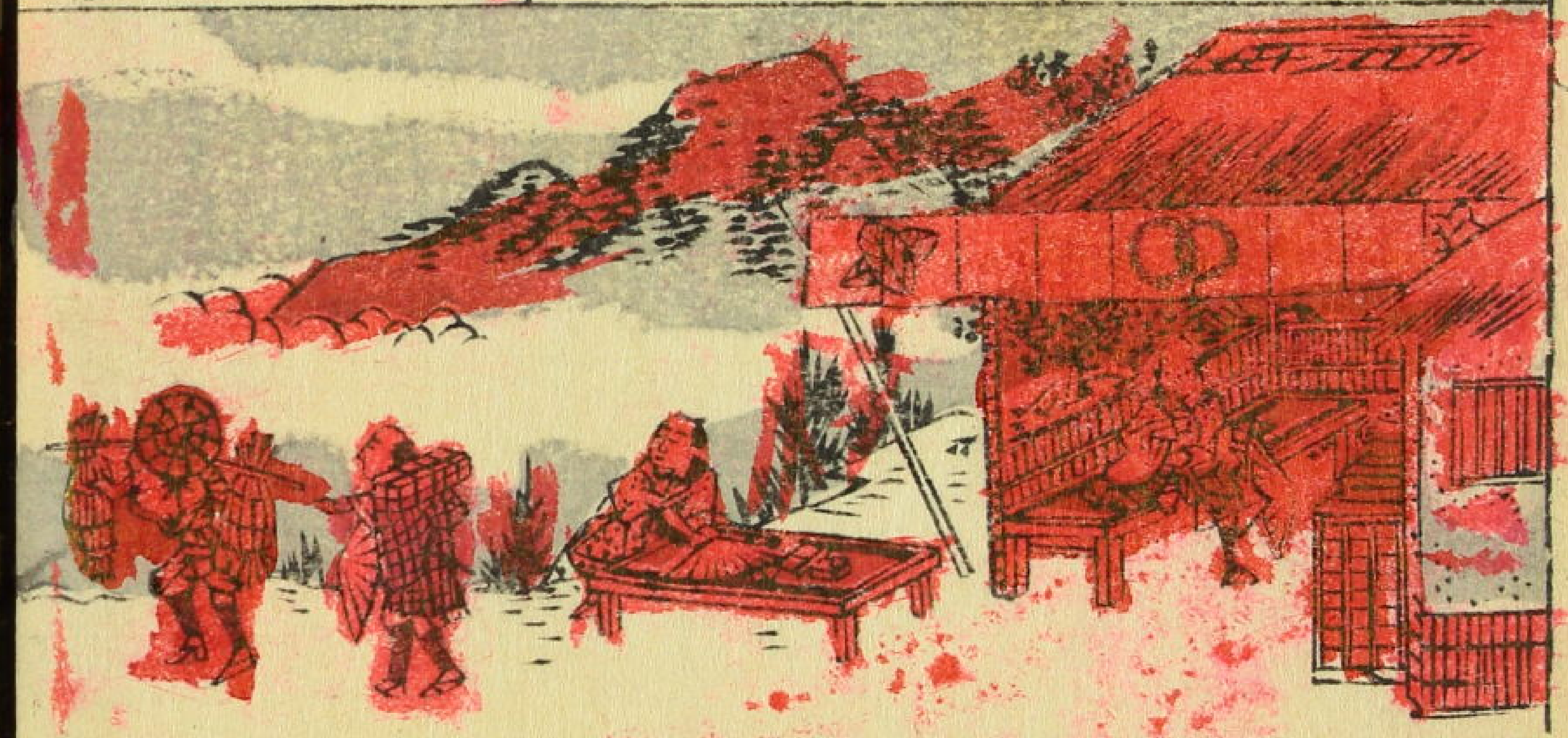
鞠師
いでやまり うき 花の日 もどかし 此日 恐尺

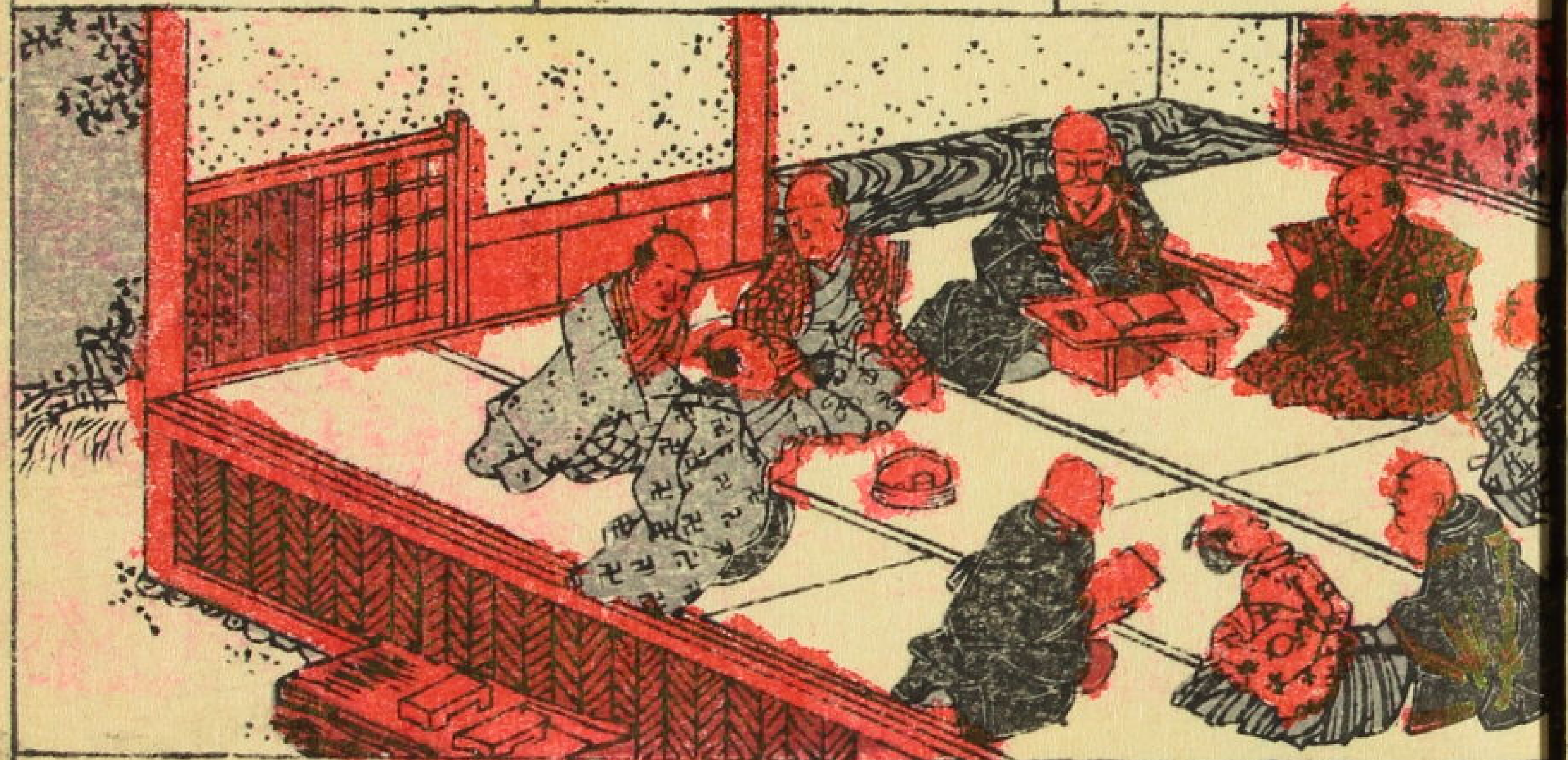
弓師
箏の ことより 哀し 弓の弦 去来

土器作
ぬきもや 大かはらけの 初ね哉 任杉

連歌師
歌人の うらやみ きらる 花もかな ト宅

扇折
岩もを ひろはれ くつらの 扇の形 旨原





其角が庵の後ろに尾花の生茂り[illegible]文七といふ[illegible]元結[illegible]その場にせんと[illegible]其角挨拶[illegible]

文七[illegible]庭のかくれ[illegible]菅原相撲初年の[illegible]牛の[illegible]庭の[illegible]

[illegible]文七の[illegible]天神を信ずる[illegible]一里[illegible]其角[illegible]

雨乞の仕方[illegible]唐士[illegible]小蛇[illegible]野[illegible]田唄[illegible]近世[illegible]其角が三めぐりの雨乞[illegible]延二年のころ[illegible]四国[illegible]雨[illegible]天神の社[illegible]雨乞の俳諧[illegible]百花[illegible]

神風の雨[illegible]二日二夜ふり[illegible]その徳[illegible]けると[illegible]

薬賣
いざさ茂
うゝゝん
浮世の
風解

壁ぬり
古壁の
栄枯
土ぬり
也代
ひる寝
俊似

紙ぎり
腹筋を
よりても
笑ふ糸櫛
季子吟

元祿のむかし神かもとれつるや
いつこゝの紙屋をさも苦蒿なる旅
枕ひせーの太白堂桃隣同乗なんと
いつぞ伴ひて江の湾を指んとする日
いと夜半の頃より病ひに旅店の女房
うめる夜寒不快なるに雪うち吹
きまぜき枝剣甚しおよもいまだ暮
の桂子みゝ一夜同衾をゆるす二人の
ものを出あとおひ安産の符をこふ
桃隣ほゝえみていと安たとうとく筆
芽のこゝろをもてそゝろに異郷
辛苦あり けまだ尊き収ひおぶらに
出る人を九絆そ礼そのがるゝ名よ
ーぎおもひ俗をすてと思ふ旅場
とてこゝ

さく出て見ん名もしらぬ花の果
あるをなくて俗の道を紛ひ
かこれ出ようとをこゞるうん
しーんせーとや



綿師
琴琴は
こゝろ
湾の
月四
夜水

綿洗ひ
いろゝの
雪花
傘を
ほしつゝ
ほし坂

足駄造
ゲタ屋の
おやぢや
いつこゝも
下駄斗り
鬼貫

お俗秀吉の聚楽第の凡の
宴ありて御ふる君利ふれそゞ
ほそ数珠のごく愛にある俗
俗ふとゝろく愛へおろしそ数句
そりひそこゝよさ我らが猿の美しき
力そこゝとあれば名君利光一さ
ゞやのさにごくい俗の愛ゝう
口座安ゝよゝをゝるこゝのと考ーこと
かゝれば我ゞ俗ゝこゝろ我を俗ゝこゝろ
ようほ愛ゝよゝそのゝゝと四ふ二下
すゝふ名君利猿翁が二人名
翁ひきゝこゝば俗の力をゝのゝ俗ゝの人
大の関ゝとゝろ花なかはきゝこゝと君
あゝ俗のとゝろく俗愛ゝ俗ゝこゝと君
こと多ひゝれゞ大ひふ感ーゝみゝれ
ゝゞうゝしのつきよきそ数句ゝひ
うゝとのくゝひゝめゞ

夏句やさんで夜中のこ望月
約今ーゝれゞ俗ゝこゝん
のゝをゝうーーんわゝし

立君
柱もそく
寒き
そぎもや
女帝も
牧風

渡守
さうさう
のり
ぞうり
着きる
時雨
哉

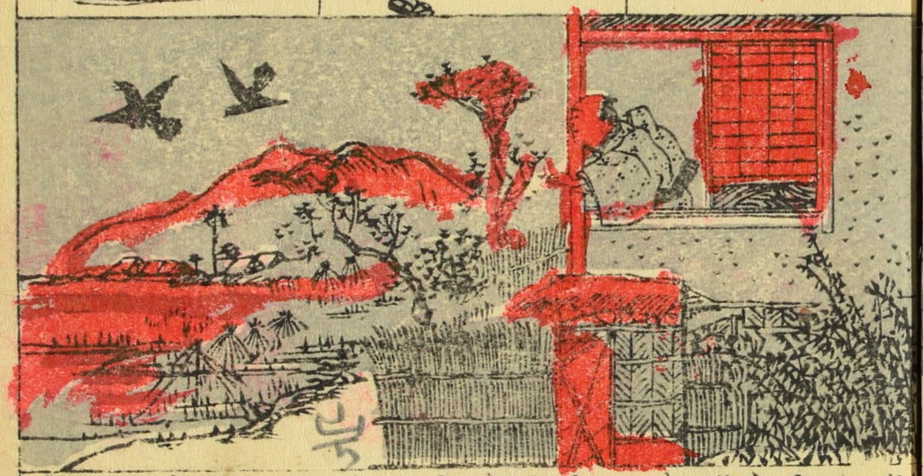
傘や

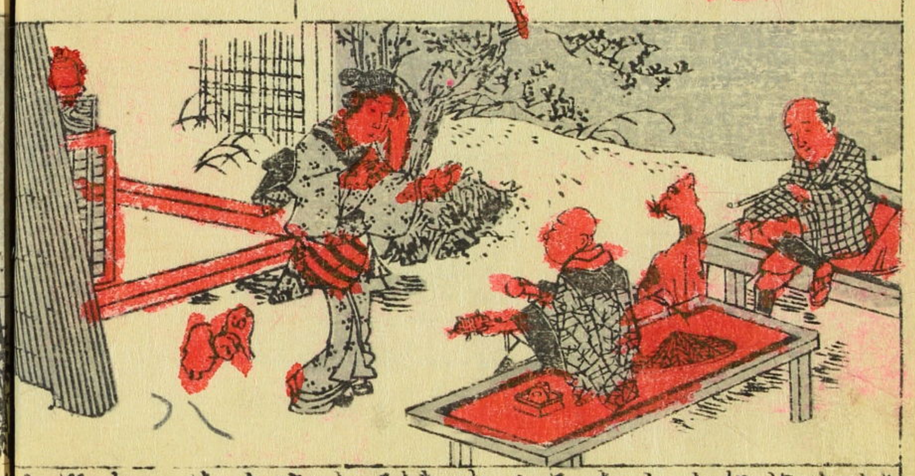
炭やき
岸の
や
庇
を
これが
奇の一字
通ひ

木樵
紫うや
いろ時雨の
蓑めろ
園指

鉢扣
振いろの
門も
色ろ
もも
許六

桶ひ
籠のけよ
日あと
ろ〜迄て
蓑着
永機





かゝる所に大坂二手組の御番衆の此里へ入込まさるゝ人〳〵茶屋の端よりかゝる女房衆を見て笑ひきさる所のさる物をうみ出石の妻ようの人の家を学せて初めの一般らせし

あくうそろ〳〵帰らせ給へ

石まの〳〵一里ゝ〳〵ありとかや

て聚まるうめんとらし

そうろうも

きてうろ〳〵

天皇おろ〳〵

し男嫌ひ

此様〳〵

今日放逸

ありうひも

風も交ぬそうめん

トおころ

都も



御出牛山の雪門の帰路をうけ
文雅の人々相見送り折の比大坂
より止宿せし社中のそろひて古
庵のまてうとそいへ共牛山も生
憎指を好めい移りて住ふ庵のさ
まも心をゆくさもなりしと思ふ夜
の捨のうへとまりて旦ゝ送うとて
ある日俳をよりとゝめられ
雲かくこ晴ぐうるゝてうり
うみとそれゝ降ぐうるゝ鳥の
春そやゝ生駒の峰をむ四こ年ふ
これを追ふらん〳〵日とれもまた
面影のこゝろをもとゝまるこゝろ
こゝろうそそ牛山さんぐ〳〵
おの〳〵筆をそめしふ枝を折
此句を吟ふれゝ其時ここ面影
さまの去きされゝその後からに
一羽もやゝふさゝゝそ名残
ろそら風雅を感ぜいとも
ふゝぎのこゝろ

細代守
かくれけりや人を凄きゆふへかな
玄水

矢師
畔道を曲くれかしの矢さらへの音
東吏

語子 嵐雪
かうき月見せて花植
木造

饅頭賣
艶しき香煙のそらぬ小春日
文牛

籠作り
流るるや捨籠ハなかし山
瓢水

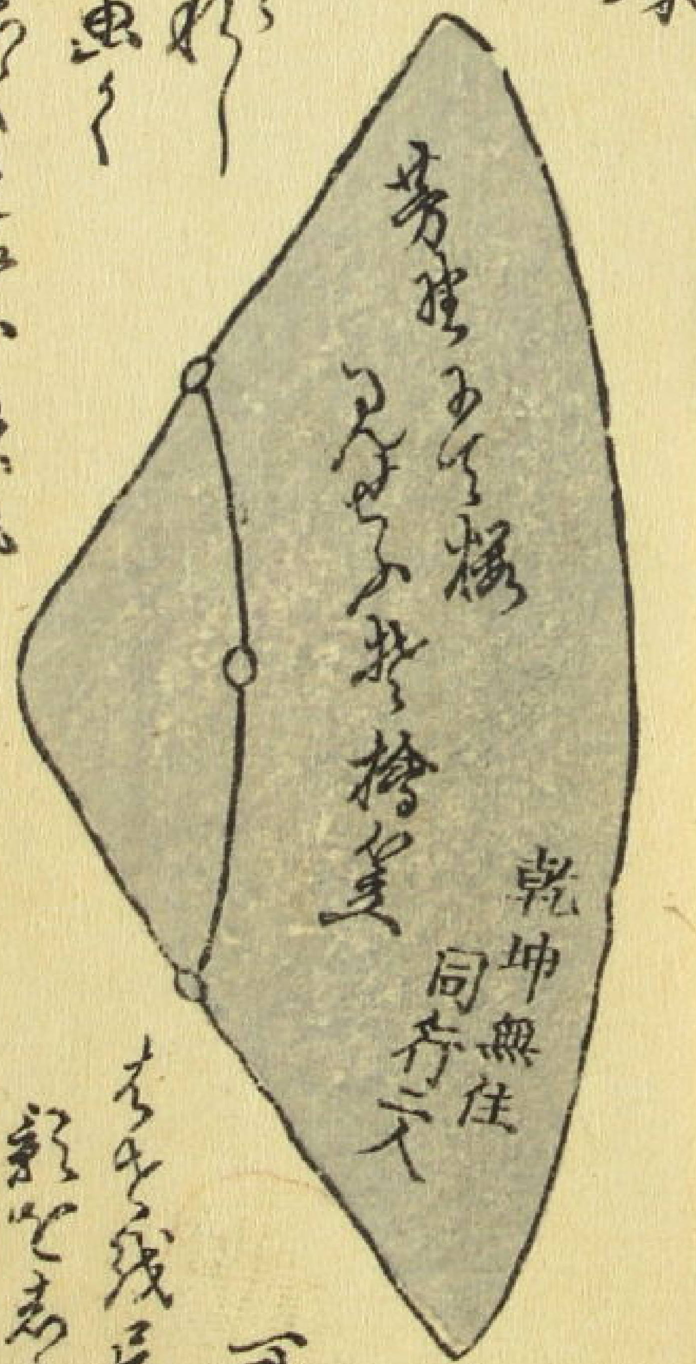
機織
はたおりや足で酌る筆の軒
乙明

終焉記云義仲寺に於て葬礼の義式を行ひ京大坂大津膳所の連衆被官従者まで此の翁の情を慕へるにや招かざるに馳来る者三百余人なり浄衣其外智月乙州が妻縫ひて着せまゐらす此の所は義仲の直墓なれば導師まして門前の少し引入たる所にかさなりて木曾塚の右はならべてあらくちらひ紙くそのびつゝ柳の有りこのごとく蓑の発りみのんと其儘に卯塔をまうけひあふ塚をきず冬枯のをばせを植て各のかはりとす次第

此下にかくねむるらん雪佛
嵐雪

笠塚

こがらしや
侘亜て
志ぐれ笠
杉風




ちる残る花や
彩て志るしの
檜笠
可笑

大和紀行に如月も半ばなる頃桜にたはれる我を導く枝折とありて吉野の花に思ひたゞんとするに彼のいらで侍まで旅寝の我が心の童子と称して道の萬菊丸と名をいふ岩菊丸も檜笠一基の今笠塚と称せ

守武ハ伊勢内宮の神官薗田長官中川平太夫といふ和歌連歌に達し世の中百首をよみて守武ふさうけ庭訓とて世にこれを伊勢論語と称じ又千句の巻あり

花桜やかゝりし寄神の春

其外の発句も餅搗とそみられし笑ひを主ハ好む花実を備風流にして一句にくさそなし世の好士のおしへとなれり附句の体ハ

其よりちりうけ出す

行ように花につれ藤のふ

手習ハ人をあやまる柳かな

ひかりあんしや

世の中の聴とも酒ぬかとまれ

落花枝にかへると見れば胡蝶かな

名子此君くさき青ものき物

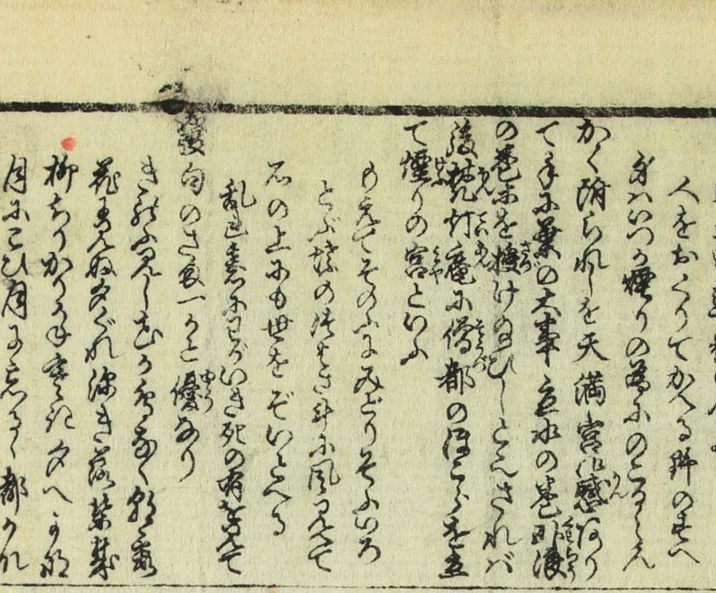
天文十八年八月八日卒七十七歳

心敬僧都ハ比叡山住心院権僧
ある時北野連歌の会ふ
人をおくりてかへる跡のそら
ゆかしさ消られぬを天満宮心感なりて
てうぢ葉の大事 玄旨の是非決
の巻ものを授けのち〳〵とこしさられバ
法橋灯庵ふ傍都のほとりを立
て煙りの宮とかや

もえてそのふもみどりそふのろ
とぶ松の枝をき舟風ふそそ
石の上ふも世をそいとくる
乱逸まふのき死の有をそ

慶句のさ衣一うと優なり

きくたふそ〳〵もろ〳〵多く発
発もえ衣ぐれ海き宮菜菜
桁ちりかうやまそれ夕へうな
月ふこし月ふそう〳〵都うれ
太神宮法楽千句ふ
日のとうげ発ふ月ふるなる菜







宗祇ハ紀氏の産ふそ姓ふう月
月を友ふ一位の尼の回流を汲湘
園を社継しそ名四海ふるめ
る秋名月のとうりくるふ

一とせの月を裏ふ今年ふ
又のとう名月の晴くるふ

一とせの月をとうくそことよしが
同じ御ふても心の月ひ年う楊梅の
ものとう又檜皮のふて堂の再
建ふとくふの連哥催めり
宗祇ふそそふ
又の色連哥のふ
「あくしく浩」
こまこを懐紙ふふく一時んどくる
て成就ふとまうて宗祇

の法光る法ものふくふ
一雑字のたくふをとろむ色ふ
ふ二字の糸りありふくのへと
いひて遠く文亀二年八十二ふそ
発そそふ早雲るふ葬を

宗長
尚祖

宗長八歳九つの春之初水の
文学の成あまた今川義忠君を
慕ひ其ゆかり一ツを学ばんと
発句野ゆき紙漉ひ宗祇翁ひ
花の本宗匠ところべしとそすめけれど
辞して九会ばやうて執筆うけ
給ひ泉谷の地ふ居を構
さゝめ泉水筑山四時のながめを
そへて営ひ茶屋軒と号も
今の茶屋なるこれより名人を
ふくことをえ連俳名誉の
人多し享禄五年三月八十五にて
物故

尚祖ハ宗長翁の遠孫にして早く
俗塵を出て希を好ミ五山ふ遊ひ
詩を綴り和哥ハ家城ふ学ひ俳
ふる時ハ牛ふのる角ふ金泊をを
貼るの慣ひ知へども自然
すゞめ児ふ任すと称号池田ふ住
四時の花を法外ふ植ることを好む
也へふ寿花の名あり永正七年の秋
希杜丹花を夢ふそ感賞
ふ命じて肖柏を便殿ふ召て
五連歌あり若竜とのふも是より
の名ありしとそ文月の廿日でりして
民の苦むをそれをあはれを
空ふ雲や雨をのぞミ秋のくも
かく吹ハてするもあく雨ふり出ん田畑
を潤せんも幽妙之事ふ候間小田を
業し郷ふ其雨が句をのこ留まゝ
肖柏のこゝろをこゝろ人事多ふて
こゝり大永七年四月八日ふ卒ス
八十五歳

実鑑あまた近江源氏佐々木義清が末孫ふて又那弥三郎と号し足利義高公ふ奉仕し将軍薨じてより剃髪して山及寺の寺ふ至て禅法を悟り始め連歌ふ心をもざ然しどご実説のふふ考ふことを難さと思ひ極め仰渇の句をいつまふ遁世し焼野へ赴くある時物語ふ昔より何人の歌ふても上の句を吟じ只一句ふそ付く下の句あり

そこでいふ言ひむうしありろ

元をたゞせば我ゆゑの上の句ふ

出家と宣へば実鑑ふて先いよ〳〵のことあり我々ごとき発句ふ

これふつけてもかの有さよ

元をたゞせば我の上の句ふも相違ひことを

ろ

手をついて乞ふとる蛙

此時の句ありとのふ天文八年

元朝の

見るものなきを

富士乃山

月こ梅を生さたられふき

雪の曙



僧上寺 音誉ふい勧進華備の高僧ありるとて人家を出て何ふても疵を預けるふ筆をさりて開けば三角三異を表しうちゞ一味一心を示ごと前書しありくよりの句をあつりありる後徳を慕ふ者多くある時大虎ふ向ひて我今日遷化せるあり疑ふことあらば皆遊ふ出て決をうるべしと法のんを宣ひ改ふ時いうことそ

宿々天地清濁色

五妙境界浄刹臺

三悪火坑阿鼻底

一機不轉古今支

斯頌を書筆を投山門ふ出家を拒けふ炎起こる火車雲中ふ現れを待上人のり移うて天宮ふむこひ火宅ふ又もやいで火車のり乗てえ仕ごろ〳〵そ

かく吟じて乗さりのふとの

音誉上人

おふぐのり

舟もさ

扇の雪

遍林勝鬱 吉左ヨリ云 永仲の人之 ○文祢元年三月 誹諧式法定 此の本家近 免許アリ

松永貞徳ハ逍遥軒と号し　長頭丸とのみ和歌を嗜給ふ　学び長嘯子をあとふそ高弟　右て源氏の名義を得連歌俳諧の二物分て能給ふ　晩の本の免許せし　一巻を授くる時　人毎の書を編み附合の式を定む　長頭丸の書ふ形を左し紀ス

今ぞしるこゝろも深きよとともに
月静なる秋の山風

松永貞徳

松永貞徳

なにと物やおもはでながめ
つくるみねの月
たてよ花もちる



徳元ハ後自ら称して徳田休意と仕へ　永禄の頃利起と云ふ人　慶長五年の役小笠原秀政に属して軍功あり　秀忠卿に従ひ　南をうけ戸ある居し　徳元を貞徳ふ時のびて呼ふ　其比の附合

夏のきぬさそふ人毎　徳元
あをうつ波のまつの下風　待友

慶長十九年の冬の陣に　秀忠卿に従ひ　江戸に帰り　翌元和元年の夏の陣に　又供奉して　帰陣の後　正保四年八十九にて歿せり

今すぐに生きてよ三代月永し　法名清雲院端甲徳山と　又の名を五月雪山　菩提寺ハ　蒲田の





紀巴

新前髪徳元
美そうや
ん
同出家門
なれ松

里村昌琢ハ連歌ヲ名ごうく雲上人ヲ師ごく后ハ人ごある翁ヲ
おちゆくかハのゆくえもしれぬ
行のみハりとうりねのあらまほしくつけうさ学妙ありと世ヲ云作人
まごわる翁ヲ
風もわくまじ雨もうたじ
ごとくへちぐぬ花ごそめてごれハ
俳ごうれびあるく人ヲんごてごれハ
うぐいごうり行ごのごものごありやと
いふ昌琢ごごのれごうん孔遠ひあり呂人
同じごごのれごうん孔遠ひあり呂人
同者の花井ごそわくごう散安し
我ハ呂ごごそその花をうるあふらべ
心の花ごそその花ごのれごうんも
ありいふへの翁ヲ
おーあじのもろこしぶりうり
いつごろごろ心の花ごなりとのひごと
宗祇の付ごるごごなりとのひごと

昌程ハ昌琢の門男ごて連俳ごそ
の名ごく白露のる赤壁の賦
ヲ白露ハふ漢ごろり水光ごて天
ヲ接ごごまく露の様ごごそる詞
ヲ引ごく一ごの月ヲそ指ごの称ごつ
こごごるハ仏妙ごとのうある翁ヲ

いづくの山ごかくる月待ごん

ごヲ付句ヲ昌程

翁のまねの時ぐるあるねぶり
花ヲ手ごて一座感ごぬヲ残ヲ秋ヲも
懐紙ヲかんごごぬ父昌琢ヲ
すちつごと業ごてえようごひろり
人ぐぬ何のごごヲやはひの業ごごと
この人ヲ昌琢ぐぶりヲぐりごごヲ
昌程ごごぐ考ごて又翁のごものごと
父ヲヲ残ヲまごごごヲ昌琢ヲぐ
ごごそのけもごごひろり

翁の花の数ごでも百句ヲ
さごごヲが昌琢二の句ヲ
のハごのひごごとのひごヲ通の名人ごごス

玄れハ何勢山田より出て遊郭を
廻ると一緒に揚屋ハ真徳の
一孤をなる毛生へ変うと云地ふ〳〵て
世事ハ忘くうつおふ云うけのてそ
を好こ徳元季吟るご同時のくん
探幽ゲ富士の讃ふ
春をわしやさうぐ〳〵雪里七雪陀
四十二案の妻
守うもくこくしやし十二神
番のあくだれくこくん宇宙
ある時癖を如ひさくふ案の猴も
きくヒふ西京ふおそ獨吟百句ふ
刃の死のおちくん風のおとうが
いさ思婦よせんをとくさく
山吟ゲ月の折橋とうしやや
雛さうまち
慶て底苦をのぐ小ん
風流の一徳のそぎくと
さくこう世こぞうて

高雪礼
笑ふ
極
花客のの
このほど
発で
あるれ
りの
ゐ

季吟ハ羽北村の産ゝ拾穂軒
と号ゝ国学ふ長せゝ関係ふられ
食録若干あり名誉を海内ふかゝ
ゑゝ万葉抄公集抄枕草紙著
暗抄源氏湖月抄をもゝ注解
をくゝる書物五十余部ふのぶ
俳諧ハ奥徳の門より出るといへども
また一種の雅顔ハり
富士の山師走ともあき姿ゆ
一僕とぞりゝわゝ花えか
笑を取ふて
復ふけさはるとうゝ門の松
名季
地えかゝくゆ木の実ゝ花の散るゆ
伝章注声ゝくゝれ
いやうゝせゝ山富士をゝ見ゆ春の空
表備
ひさごをゝくゝもゝゝくゝれ
八十五翁かゝ宝永二年六月十有
幸氏地のそゝ山無まるれ春を

拾穂軒季吟
夏渡ると
こゝろ
ゝ
ゐも
なゝ
この姉

湖春（こしゅん）の息男（そくなん）みてらの塾（じゅく）を継（つい）で歌学（かがく）所（どころ）となる雛祭（ひなまつり）の処（ところ）為（ため）のまさり風（かぜ）相応（そうおう）情（じょう）もり桃（もも）まつりのうた春（はる）べく来（き）て雛（ひな）祭（まつり）みるふ季（き）吟（ぎん）真（しん）雄（ゆう）より作（さく）そへに改（かい）秘（ひ）蔵（ぞう）の書（しょ）を桃青（とうせい）あるへ抱（だき）持（もち）教（おしえ）訓（くん）ふるの時（とき）俄（にわか）の迅（じん）風（ぷう）窓（まど）をおろる折（おり）うた

○あめつちの咄（はなし）しぎるて時雨（しぐれ）が設（もうけ）白（しら）狂（きょう）歌（か）亦（また）流（ながれ）れうる名（な）のなるへ

○名（な）の附（つけ）松（まつ）西（にし）行（ぎょう）法（ほう）師（し）の詠（よみ）給（たまひ）ふるくれてある心（こころ）

○そうりや蓮（はす）ふえてれてある心

日（ひ）ころ乱（らん）の附（つけ）松（まつ）あり梅（うめ）桜（さくら）牡丹（ぼたん）もくふもや花（はな）もそなくふ

嬉（うれ）かろ一（いち）はいきるお一（いち）ツう筋（すじ）

ゆくえ よ京（きょう）へとるふ帆（ほ）一（いち）ツ

元禄（げんろく）十年（じゅうねん）正月（しょうがつ）十九日（じゅうくにち）父（ちち）八年（はちねん）先（さき）立（たち）て没（ぼつ）ス五十四（ごじゅうし）花果（かか）院（いん）と号（ごう）ス

山風元隆（やまかぜもとたか）が花（はな）浦（うら）の庵（いおり）にて雛（ひな）惜（おしみ）を乗（のり）合（あい）の門（もん）入（いり）ふるく

おもふるくして徒然草（つれづれぐさ）後（のち）拙（つたなき）補（おぎなひ）を著（あらわ）し長（ながく）方丈記（ほうじょうき）にまるうご書（かき）き雛書（ひなかき）を教（おしえ）ふ上梓（じょうし）して悦（よろこび）ふ強（しいて）紀（きの）の人（ひと）より中（なか）ふる宝（たから）永（えい）とい世（よ）と待（まち）歌（うた）を拾（ひろい）て相（あい）ふの教（おしえ）文（ぶん）を綴（つづり）雑（ざつ）ふまて雛（ひな）名（な）ふるへ

傘

天（あま）ふするかへうさもうる花（はな）のあひそめそ

金（きん）おや粧（よそおい）面（おもて）向（むき）へ月（つき）と花（はな）

紙

ちへ秋（あき）やとこその夢（ゆめ）の花畑（はなばたけ）

十夜（じゅうや）の盛（さかり）

簀用（すのこよう）ハ志（こころ）ぬうそ老（おい）の救（すくい）

たふハ

月（つき）のうれあふ盛（さかり）うそへの海（うみ）

持仏（じぶつ）

終（おわり）もく道（みち）つきうれやくぶつ月（つき）





我（われ）仏（ほとけ）村（むら）湖春（こしゅん）

弱（よわ）の

当（あて）の

揚（あげ）

霜

心（こころ）

乳（ち）

泳（およ）

花（はな）

残（のこ）

の

おつて

岡田将監八条流大堰の土もり
式人左文右武の文えらく
ふ和哥を好こそ上等道をそ
ぐれ古人の細意を礼よおのづ
ゝ風藻の跡を拾ひその業をあき
らめ人も知り世ふも知る斗りの
ものゝ多きうち或る夏都ふのおり
近清殿へ四見舞に出るまで
五月雨ふよくこそきこれかのあ
ーあそそれ
岡田将監

あのくこのへをさぐる将監
探をつけて中よれどことの外に気
ふ叶ひ口説れなきおうごのうおりひ
ごけるの幸ひふあひ愛いをとろい
同様の徳あろろ又行儀を泊て
世の指南をまく郎借

元和をさそや根の初紀案
尾花の風ふ吹り袖の音
月数あい踊きとくを催して

牧田句當重一八作勢山田ふり
住て名誉の盲人あり特情ふ
く考ふ十二律の組ふをふきて物の
吾悪を勢物を得ろろある時他の
家おかろう門の北窓を杜ふて安き
音の怪しきを悟り入びきそなめり
その家ふ汚犯人あって口論の上刃傷
ふ及びしことありうり実ふ入くを育
人の者ううんん難を逃れしもさ
奇とふべ〳〵此盲人守武家盤の
風を考ふし幽玄をあふくそ
天神茅納の独吟
梅ふくいへの独や北野殿
とぶ学のあとを老まつ
もの果ある光りふ苔の羽を伸て
月ふおとうをそふそふる古そぶれ
俳人を津安その女など氏門より
出重一八十三翁ふて
寛永七年辛

梅翁宗因八西山堂豊一と云俳
八代ふ住せ一ぶかる家あとありて
のち武門を遠き身を雲水の行方
ふ任せ一ぶを見月の旅ふらぬめ一な
仕又ふ寓居一又湖東ふ杜ぶ
又難波天満ふ移ふ心保のまゝめ
ふるの宿ふ醉ふる住所をりくえ
梅翁の名はひろるふやも梅ふ見の
河をひくふ北窓ふ雪のかをそへ
て世ふそらぬくるく武陽ふうり
俳諧の俤林をしりく筆ふ盡み
してやごとふ紀人もしばしふ今ある
夏東山より大阪へ移るとて

暮山や或ハ舟ふる佐ん船
夏の数やあつま嶋ふ月八西
あるとうのくまふ
くが安一こんみとあく百とも

その一数ぬそれ日
為安一こんみとあく百とも

梅翁宗因

昌琢の門人檀林風の祖也
即非法雲の門人
法雲の門人

寛文二年歿
三月廿日没
寿七十二

夜乃あや
さく
春ハ花

斎晩年ハ俳諧ふ専ふ
白雪のあさ
一面ふ
一代の秀吟
けり許ハも古人ふ
為ふ評ハ
一斎

檀林軒松意

雪折や
むら
かつる
笠ハ
月



田代松意ハ江戸神田の産ふ
家周を捨さ去と斗ひて独て
俤林を立俳林と号しその比
寛紀の余情流行の体を悦て
宗人をそゝのめ俳書教示諸
俤林面談をそゝめ一字の傳さ
旬のこゝろやうふ教へられハ世
間皆俤林風ハなぬ人そくの
されハ宗ふ俤林の本ハ梅の花
世俗ねうをさよの也号 宗因
松意ハそとの縁うよてされて
ゆ宗ふ通う松の山風 一段
強むまハ俤林つゞく等の雲 西友
ふところ江戸ふ俤林風をひろめ
うへ山松意と俳諧の正友ゆく
二人一てかをあそも

宗人ふ道をさゝ
東行の功をねうう

雅情強く名をねーるあう
『八相のうゆはけぬ花もうれ

重頼ハ京洛の人俗称大文字屋治左衛門後ニ維舟と号ス貞徳門の俳諧ニて其名を人ニしられ後法橋ニ叙ス毛吹草犬子集を撰ス俳林の此まで長ス是句集今拾遺を多くふみ生涯庵き性ニて同門のくくと争をきしを断るなりまさなり生涯拾

花ニ行心や樒ニ相の構

秋やけさ一と足ニあるぬくひ様

冬入や雲ニ死体を路中あり

料理あり鶴ニ先の旅もなし

順礼の構えうり曲く来持れ

ひずんとそ慈悲て折るる花ふ

右は竹ニ曲きて

木綿帆やかろこし松も雲の岸

阿蘭陀の文字が横ニ天津雁

重頼七十ニして業まて延宝八年六月廿九日ニ没す

来山ハ泉州の産ニて書を能一生を十を去るつ是等の人く十萬堂と号して達吟ニして中業俳林の翰選之不羽女人形を愛して我座右ニ匝を死去ニ死ス

西行法師ニ銀猫をあたへるニ門前の童子ニあたへ通りしとろやいそこそあくまで道ニてされの一形あわひ懐ニ机下ニ居て眼ニ遊びよハ枕上ニ休せて森覚の仏と毛世を弄んれば画本の達磨など寂寞て科もなき身を白眼にあざけるより八達ニまして物いはぬ我ぞ手ハ我ぞ病気せざる蟹数の痛を覚へねハいつまでも居住居を崩さず是を待ちへと今宵ひとふ体をよりやハうけおし麻しげに物くらねハよし何かの娘ハ掛る膝ハ年中衣裳あれと暑さを知ずね公方寿さの年のよるとさをミ冬ハ糠の衣をかさぬる様ニよりかげんにかはるハ女のなニ似せず是は色を好まず花もすべて夕物ニ由わたべ手と共をもとも寒もすぎ死なくとも風雅が恵ぬそらのやさし家さりとも気きじいうだ国を只いつくの大ユぞや土所城若ふわくらはその心の世物がさうやれる身も床の主やろさそうり 来山

ト養ハ泉石場の産にて牡丹芍薬雪柏の類多く培養し花開く時は遠近の愛友と呼ビ醫業ハ名聞栄利を思ハず人尊敬せり場北の在ハいふ〳〵ところへ往女地獄の住〳〵高須とのみも実名ハバト養軒ハ南北のさまざまごとごとくたゞ一ツのたのしみなりけり

又俗よみ指で

そのよりの木の葉の月の行かれいありけるものを実ハそうだし

晩年

台命ハよりて京都ニ召れ官録を賜りて狭狭洲ニ屋敷地を賜領せられバ壮齢ハト養ハ本道ところ〳〵ニ思ひしれうち地をとる外科ハこそれト養和学ハ通〳〵歌俳諧ともニ風吟ハ妙あれバ柏ハト養とゝく唱へり法名ハ昇雄と云

延宝七年七月七日ニ歿せり

生井ト養

名や

る

の

心敬

井ト養ハ西都の人ニして大阪の一人なり住吉社頭ニおゐて狸吟二万三千句を一巡せり世ニ二万堂三万翁と称せられ文和年中ともに大ニ行はれ門人四国筑紫ニ充満ハ一代男小夜嵐ハをはじめ大ニ行はれ浄瑠璃ハ近松門左衛門より始まるといへん万句興行の時独吟ハ柳営よりハ始まるといへん

来りて西鶴ハ点者をさゝへ点料を定めて点ハ上ハの三筆人帳を作るハ此時ハじまる

の一風を示せバ賞翫して門下ハ入る者多し一時ハ門弟も一きハ同盟して

平ざるやまのく生る苔の花

朝ハ花ハ夜ハ苔もなりけるの月

ちねふ春くれ初夜ハ〳〵

元禄六年八月十五日五十二歳ニて卒〳〵雅波ハ千日ニ葬る



大晦日

あるや

せの

さるる

この画

大淀三千風ハ伊勢射和の者にて
十五歳より俳道にこゝろざし日本
行脚して年月を経へ国々の風俗を
識し俳の詞変化するを諭し俳
友を集めて附合の興を催し又風
景眺をも記し旅中の記を筆に
まかせて綴り懐日記積りて紙かず
六百余枚に及ぶ後是を板にきざみて
行脚文集と云ふ晩年相州大磯の
鴫立沢の旧跡の圓位上人の像を安置
し鴫立庵を立かうそれに虎御石
の木像を小堂におさめ明和元年
號し末代までの遺跡とし同所
に碑を立て東往居士と称し行
脚の間出四月四日より出るを命
此の遺言なりと

辞世
なにそもや又夜世の旅の衣ぐ
世皆以来折の宿の食逆せ
今六文で末頼みあり

大淀三千風
花に来て
笠たゝむ
かる
旅
一葉の舟

○三日月を踏えて落る芭蕉
塩くのおちてふくかる文 柳

安原貞室ハ一嚢軒と号し初め
は正章といひ貞徳翁に付て於余年
寄あつて俳諧に達せる故に
人尊敬して重頼に並びて称をを
得ても常に不和の色顕れて
俳道免許を得し時保の感ある
天長くちひとあむるや秋の月
貞室是に答して
ぬかうし花あんの霜の名つけ
秀吟あまたの中に名高き句
○これは〳〵とばかり花のよしの山
古浜琵琶を抱て高踏にかり
政の月へみよし野の雲や二の雪
武蔵にかり隅田川一句として
いざのかも漂の鮎焼ひ不知
人の手かりしを呼て
虫の音きのふ涙せる文へかけ
二世花の下と称し六十四歳
寛文元年七月七日没洛上善福寺に葬

安原貞室
涼しさの
ゝ
降り
なれや
歎半北月

○高くたれ也井の居ハ
塩く青あさ赤中り句
佃守子ク郎
まも白之郎
安原吉式ク
お仰手も
赤只男
文煎の長

三浦屋の高尾ハ歌俳ともに名人にて全
盛の人の為す事にて画もよくし其の画
の自画自讃のうつくしきあり
此情を今によく残せり其[illegible]
其頃の客に[illegible]ありて出入しける其の
酒宴に[illegible]俳諧者をうけける
尾[illegible]君は[illegible]客あまりてうと
返しけるに高尾は其[illegible]
京の吉[illegible]
白しと尾[illegible]
[illegible]全盛[illegible]今
一度[illegible]返し[illegible]
あひて大坂[illegible]
と尾[illegible]大坂[illegible]
へ下し[illegible]
又[illegible]高尾[illegible]
さすが[illegible]
伏[illegible]の画[illegible]尾は[illegible]
あれべからずぬ客[illegible]
ゐれ[illegible]られて[illegible]

貞恕ハ越前敦賀の者にて重頼と
同じく大津に住し貞室の門人なり
又[illegible]の梅翁の撰林にも[illegible]て
待まくの人をもみせよ時鳥
いづれの里も卯の花ト
宗因附けしもある時のつけ合に
遠くへ出る今朝の旅人
といふ句に貞恕
道ひろく[illegible]るの康
と附てより俳名を大津の馬のくちをと
呼れ逢坂山に俳室をかまえ数十人
の俗俳を集め諸國行脚を[illegible]
接待をしける事ある貞室の門人
表しといへども跡をおぼゆるべき栄[illegible]
然るに此人問ふる所あり一生死の
事をおぼりあきらめしてこそ風
雅の本意といふべし
貞恕やがて深心を[illegible]
七十歳に及び元禄十五年二月四日
[illegible]上羽實相寺に葬す

惟中へ備前の産そめ岡西一有又〔ゆく〕堂よるのしら伴勢の手一ふ
俳諧をまのび発書ふして和寄もよろくし物金革紙横堂名被を書のらん〔ら〕家図とも立り堂くあるこ死
土佐の侯寛が画一人丸のれ景をもとめて家図の許ふおくり来一かれバ
文ふそへて家図前ぶ死をして

學窓伝作のさめ
影両ありけるふん

お筆の先毎のくと窓の学こい
家図も頭うもあるくこる俳
上えやおふそしめて美の月
やくちりて見るくうせ山ざくら
とうとあ妙風もあるくうり名水
帯ぬるしのまぶ旅ふる衣え

漆 夜ふ
鬼をあ人綱公時ふ方相氏
五十四業ふて大福五年
八月十日 惟中



野そは立蘭ハ俗新雑庵作長清
ふ歌をもよくし東都親王の書
法をうみ画もよくう京東山こ家
自画を引ひきあび華を著して
鳥丸家の門跡をまび出家仏士は
か華しこる意文の通号の時機峰
九百吟を吟くふ生中ふ

雪と消しあとの光りや法陀多果
手向ける花やれ品の浄土経
死補の線

花とのへばよ一世我思ひ去年とのくバ
ふ死の吹雪のおもし生ふるよのびん
氏名のふをへふん着されうる機
の縁を結ぜよしの我妻のせをみえ
とありそのそれをとうて

八重のふるをふ仏性そ死の向
座ふさんさぞふ落葉ハ東山
緋桜

月花のこ向月をふ動るせうふ
寛文九年七十二業ふる頭そ

翁は伊賀の産にて壮年の官を辞し
江戸に於て風雅を業として桃青と号
し深川に出家して芭蕉翁と号す然るに
俳道世に衰へ代せるを正して法式を定
め正風を発起して普く天下に弘め
和漢の学に熟して且つ西行宗祇に学び
俳の許を得ずして[illegible]風流に一家の
言を立て数多くの文を書きて紀行の
吟ハ句集にあらはれど数多く生涯
行脚を好みて松島の曙の景に
笑ひ象潟の雨の夕べに感慨の
思ひ妖艶の月に露けき袖を絞り
富士吉野の名所に対して吾は一字の泥
あらじと名をそぞろの世の中にうかれ
去て山栖にも心をとどめず本草の色香
をうつし百千の秀句を残すものゝむしの
そゝる思ひをなくれみ難波津の浦辺の
見果て元禄七年の初冬十二日五十一にて
去て其肖の客となりし霊魂を葬る
[illegible]

東嶋の宝井其角が父は芭蕉翁の
書を好み老人東嶋を桜氏にして
其祖は江州堅田の士竹氏と称し
し者ハ医子が母方によりて名を
とし七十余二十余の秋の月をやめる
松の日に改めて其角の情実を起し
めでたき人の名ある辺りにて神観に
於て更科の句を残して大宗師の
為に隠る頃より術医を学びてその
麓と事を何某氏より俳諧を
釜惠翫葉の趣ひをこれとも世路
をいとひて名の風雅を極めて
山居に住みて五十年の称に市店を
嵐雪を桜凡に住へて楽しむ系家を
机をさゝぬ七十と世をあまりて
の花さそ東にふるかぐがおもむきし
湖上に出て東野に終りをまとふる
こそ大隠市中の人なるべし
入る月の跡ハ机の四隅かな

芭蕉翁

物いへバ
唇さむし
秋乃風

としよりも
まだ
ものぬ
めのや
年のくれ

其の南の東順の島にて擬事いと多の
姓名り医家ゐ喜れて能俗を業と
すぐれ玉が光ふ性〳〵淡泊すぐ
宝井晋子狂雷堂善哉庵の号
あり特を大巓和尚ふ学しまるを
書記画を英一蝶ふ学べくりけて
称のりふ幽霊をしんで踊るを
多く聞田ふ雨乞の時又それふおを
慶う世ふ義の神楽と称して頃
る秀吟ぞ〳〵

名所

ゑがくぞ松ぢの浦にろふ何を栞ふる
次ゞの浦にろふ稲を干潮や大井川
夕立や家をめぐりて宗鑑ふく
源氏の画ふ
傘持ち月ふおくるぞ
幸山の僧

春ふ恩ふ門の宝祚万代食ふ
宝永四年二月廿日 十七才 筆

特ちょうせ君さよう吟の俗
柱て建くとれいつ石と吟の時今時
碑伝章とのく山八百歳ふ末ふ
とのくそや紙箱をふもくしてい
体をゑるとき文をよれし医学を好る
思ふ自祝もまく詩尚岡柱ふり

花ふ秋ふく仮名ぢろふ折ふ
葉の花や利休ふ同ふ吉野山
年もそやふりそ流ろくそ花川
ふろくふふまくぐ〳〵の月もえよ

流川別荘ふ遊泥をふり女を集て
普のふ遠ふ遊社ふよしとう郎ふ
社中とくふ是より始ふて芭蕉翁
日比ふ家集の風体を学ぶれけ
ふ追善ふ会る建を催し

あすれさや財ろ〳〵時の山家集
七十五ふて京傳二年八月十日頃そ
感慨る中猶ふ境ふ暮ス

嵐雪の門より出て彼岸詣の者どもの往来に茶屋の女房子供とのゝしる其中に美婦人あり供人あり門に入て三年ぶりにてみる茶娘をあらそひ寝覚を待て嵐雪と号し自画の双幅ある物もらひ芭蕉の門に入り素堂嵐雪と三翁の像を画く嵐雪この翁の左右の連句をうつし給ふ自軒主素堂嵐雪中庵未の号ありて起句と嵐雪を取合ひらがなにて其句の形ちを書ひらがなにて其句の形ちを書ひらがなにて其句の形ちを書ひらがなにて其句の形ちを書

かくの蚊帳の故郷人残して秋のそらゝんとうの夫人の帳おろす

唐の蚊やはねふ枯るゝ日もなき

上京の附ふとんにて後の夜へふもとゝぬるゝ夜ゝ文義中る翁の場ふて

叶やふかく眠るうん雪をとけ

元禄四年十月十二日死去の句を作る森

芭蕉の尾花沢の清風にて留主居をたのむ

詩をよく作り俳諧を好む風雅の人なり

ふ家を借りて母ふ孝ふんとふくふ

ふの松ふ風をつかの病ふ

こゝより長門を経て帰ふて入り

松本山よふふくれ栖ふ法華経をよむ

ゆく嵐なりしと今ふ山やれりふ

ゆく暁のねざめありふ

叶ろろ

山やれりふ紙帳の中の西巨燵

故郷を出てすでに廿ふの月

山家のふ一盃の酒ふ

死ぬ春ふ月ゝまなきをのゝ

ふる月のふ酒を十秋ふんまゝ

ふごゝろにて

ふてふうて秋ろのふたゝもゝ

又ふ秋の風をふ聞ふ庵ふふ

うづくまる茶摘のふの下のうたゝ

のちふ年閏実ふて外ふのでゞ彼ふ

宝永元年二月廿ふ辛ふ四十四才

玉棚の奥

おとよ文にて十文字

落柿舎吉左



秋風の





松会嵐葉

小萩

もぐら

隅へ

傘持ち



秋風ふ折てかの紀菜の杖

元禄六年八月廿七日発句

浪化ハ京都東門跡の連衆にして
我中井氏獨泉寺の住職と云縁の
以入一生の句を白扇集とのふ文ふ
名あり滿呂とのふ坊主の流を汲ミ
汝ハ滿呂の汝が性のふがきを
砥て小刀ふゝ山の波をむくがめ
されバ甘き物をのてむつべ同盃ふむ
ける通世もあゝ人山色へふ汝を
エこハ狐ぶが猿を養ふふことうべ
茶を汲それ〻の歌を汲あらし
業をよこハ春の日を揮くゝもれ
竹田ろ人形ふゝんふも土針の浪のハ
むろふこそさるや汝ら頼の漫々と
ちて湯とも飲ともうれされバ生ふ
縛とゐ一生辨多を用とも実ふかて
生成養ふとのべことハ死ぬ人楽せ
ふて自然の摩の鏡ハ仲哀のふ人の
崇りやまるてる個満呂の二字をとりく
汝ら新の万福を祈せハ汝ら心ハあ当

井波浪化
春や
札ふり
掛ふ
書れ
こゝち



美濃流よ云

東花坊丈考

訪ハゝ
しの
書

軍
年也
み

怨

吉野の
心

或ル見孤又謎ヲ文物ヲ走
東武情西死別ヲ
梅ノ花ノ紅ノ有ノ漫ノ世山由ヲ伝ヘテ仏ヲ
寛保十六年二月十日没セ

許六は江戸表の武士森川氏の人にて五老井といひ又蕉門の俳諧おもて俳書数多拵ぬ俳学の用意をみるに其ぜんぜんたる風雅を悪せん心ねふかくして行のあるなむやうに雅の名こそむづかしけれ

さればこの人の子入学の贄ふ
備家何うぐ猶子落ふ入て道を
学ぶべく白のろこふ撥撫七年
のあとのふ絶ふて生ぐ尚時ぐ年
ふもて宿もふ帰り由ぜひべくび
事綿ふまづめる根のつる芽か
殺うまぐ緒情あり

贄の綿へもえ云の時のまうふ
かんきんの万ふ新衣の蓑うれ
ふもとうふ出うくうみ

橋女ハ丹波園梅原の里田氏の娘ぐ
幼きぐうり風雅をこのぐこふ万の時

雪の日や二の字ぐのふ筋の根
俳を雪冷淡ふ帰び年ふ春ぐけ
れば園の守人村の刈り生家ふぐうね
新七を誉のひて

梅ふれしや拾をぐ殿の玉
中華まで風雅ふ拾びて海淡ふふ
ふ七をうぐぐふ時ぐの家を転ぐ
て日々ふ情ふ年を来ひ一る万ぐぐ
て八風石のうちふ玉を拾ひ泥中ふ
ぐうをもうる心地ぐてうろこび後
舞をとうて男子をもち史ぐて逃ぐて
ふさぐ盤桂禅師を師とうて尼とう
夫ぐ号も其格道のぐ至師のふ
なひ給ふ権現紀千乾ぐ寺の僧ふ
庵を俗ぐ変ふ性て

秋風の吹くるかくふ糸桐
ふもをくもちるタへう郎

栗ふ
糖
や
勿
新
女
花

老母の墓に伊丹の産俗称上の藪
ちかき所に権兵衛と法名を彫付
猶め佛を維舟水学び又宗門のへいへ
先師松江翁と宗門列座の余ふ

一すぢに近きも遠し吉野山

とのみ有るふ

猶みひさごに於さみてふくべ
軟等よの山水翁その面へあやと
称ら五一鬼婆ハ嘉永七年

よの山花の雪りをきねことして

ひさごさへ道ぐさにつりのく

とのふ古寺めり二のひさご見付られ
ど著名の句ゆゑ此所に出す

嘉永二酉年秋九月
一家をあつめて獨吟百韻興行
家角にて突伐こがらし一女を送候
の発句もむくつけもの気をおさ
へてよろぼひ七十八翁

元文二巳八月
二日終ふ伊丹岩隈なる木藤也

筆とりて拭ちらすなみだの雨



伊丹鬼婆

骸骨の

上を

蝶よ

花見

この郷

宇津の名吟

ゆらゆらと赤の実

動き秋立つ

咲つくれるかこの花の数ふ

上洲の旧家屋かくのごとき



雪ふれば

心

法ぢ

海よ

ふるや

日のげ

是てさて一年おくれし桜花
うぐひすにさへ先休めをされ
まし花やかりなり布目

牛吉といふ男ありこの村の農家久右衛門の召使ひの若い者ゆゑ十四才の時より主人村松を好く能く働らくを主人も牛吉ばかり可愛がり巻ちらを附ける其の実それ迄の田の耕作より屋敷の掃除迄牛吉一人の手を以て為すやうに成ぬ牛吉も又主人の為を大切に思ひ髪を切て通り者となり日夜心を尽くしむ村の為ならば苦労を厭はず辺の者よりも叱られ役を買ひ出て喧嘩の仲裁をなし一家の外他の争ひ事迄牛吉の指図を請ぬ者なしでこそ牛吉の村里人の信ずる所なり文政九年七月廿五日物故せしといひて其の翌日のごく病気にて七日目に死せ

辞世

さそれもよ〜散りや浮世の通りぬ

古来田村牛吉の辞世の歌を愛し俳諧をよく志花巻二変生庵何がし

より聞きおくりうる処なり

浅黄の帆かけて走れる舟人もせっかくことよの浮世の波風に揺られ揺られてこそ乙な味ひもあるものこのまゝ陸へ上がってしまふ気はないからどこまでも揺られてやるつもりだ

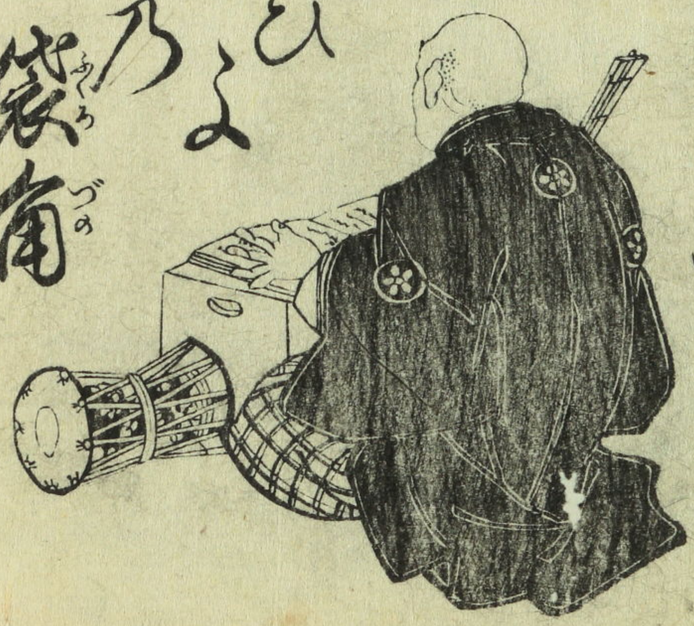
家提酔てのこと也う一盃と病牀満さ風ありんの乳母もまゐべくさぶんとや浮世風のあくびのあまり唄の杜どろ〳〵きふうまりてかぶらぬもかもうて辞々辞をやめて名残こふきこもだのいとめのちぎぬうちぐやろ〳〵もろたれ

あげ〳〵まてくれ〳〵九

日ひらいうのおり

しと坊、相州の産あて異風の道
人のり談雑誌をあくしてまさ乱辞
三味線よりさるまでと達してつまみ
辞ひ初ひてあひまく紙業とも
智浪連ふありといへども久〳〵
富士をのぞむこと叶ふまりひ
街道をふ廻りもてもり鏡舟洗
盃乾門茶りそ富士をのぞく
辞世をよくして亀せ

九十歳のこと後を
殺生戒
いろねどの虫のいのち紙綿作り
邪婬戒
猫よふ丸猫ふくやのふん
偸盗戒
拾ひぬすむさ風も替のかり
妄語戒
あり〳〵ひのふ死世を忘れ夫婦
飲酒戒
さの葉の乱世やそ〳〵や雪の暮



声こそぬかりし坊
おのれよ
廉乃袋角

百里ハ小田家町の車商人
仙風狂風の幻雅のあそび初め夢風を
ひく三十六年一日も御油ふ拾りあ月ふ
風雅も一ふと雅あり
一ツある家も拾年のへの字ふん
こゝろもち女の思ふかふふり
仙郎ふ来て
雪のふみふり踏ふせよ五用波
宝永の来まつぬ人をふんこほく
ふ旅立千道の花九ふすでと六百余来
旧吹の勇ふ参く

蛸速やをの三蓋ふて五月闇
松並ふ橋を入ふ風次ナの夏
ある神やおちまち見廻幸手
ふぬ人ふまの辰の世ふ入る心
熊車ふて友と笑り日数ふて帰ふ
人とふる時京より修ふ来て餞別ふ
百里来て百里ふ日や風ふる
東ふ旅千五月十二日六十二て辞世
邪でふて浄き月をふそし

うけ
ぐ
き
分そ
悦べ
や
生
みる
百野百里

琴風の都ありしが彼の都
葛西にて其の角力に
女名をあげしこと其角の
の時上覧の
琴風百里と
を立て琴風百里と世の
て翁の奥の細道をうつ
馬し享保八年二月松翁
旅行の餞せ
汝が旅行の
つ絵の幸よ
待そとよ
仁左衛
百里も
みちのく
冠里公
享保十二
年二月七日
一とのぬ

琴風

菊ぞ
る西
や
鶯
新
ぞろ

秋色

秋色ふぶ
名をあげ
の時上覧
琴風百里
井のそこ
井の
大般若
井のそこ
の模様
如何
中ごを
通のよう
世よ
方ふ
秋色ふぶ
寒ごとの
男女の子
享保十年四月十日

秋色

親
とろ
早
苗
とる
女の那

千代へ加賀松任の産にて俗称
福太郎といひて俳諧を好み
句を善くす

○俗うろの称ひなど俳の称ちがう
文ふ別れ八廿五歳の時なり

○私て見つ夢ぞ夏の蝉の声さび
野子ふ家を願しあ声とうり別ふ
後て逢ふ国とうふ画も是後明ふ学ぶて
妙ありあるん画をとふ後をれふ書て
句られとぞーふ句ふられとうれふ

○句郷や地ふさくとて称あおうり
あるん声うりる女の足跡を見ふ泉ありて
一トかんんあるも称ハゆうきれ
乙由方ふ安否を尋ねる称ふ

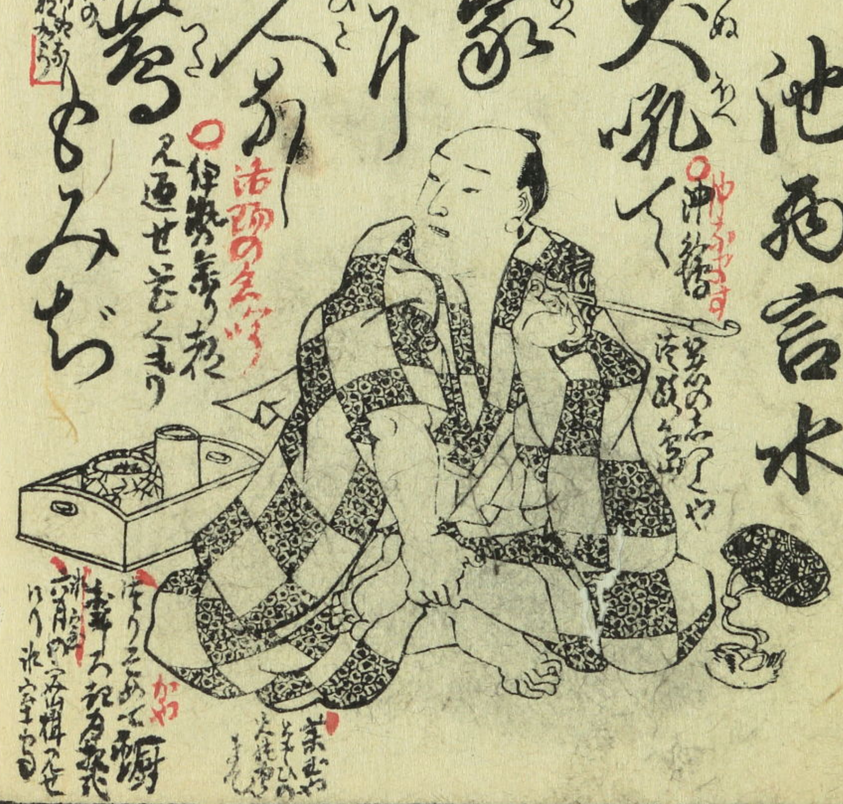
死さる句ふい老ぴうる称ふ
千代女ふ称のうへーのもーふ

死さる句ふ老ぴよれ称ふれ
永平寺の長老おとう邑のひ千代が
尋ねんうんうんを三千の心をるふ

○千ーりや蔓一ト節のふて



池ー雨言水



○神路
○活動の名ぐり
○俳諧寄せ花
○俳諧寄せ花

大ー乳人

家ー

人ー



千代女

支考門人
千代尼 素園
無外尼 北升

○俳諧寄せ花
○俳諧寄せ花

雑順は京都の社司にて連歌
を達し名を元旦の大団へ
召れて連歌の点をせしむるに
感ありて物あり俗にいふ
つるやの句を
その後かの大寺の
いれられ完ふ
芝蕉小圃下
出るふ雑順
那ふおよび雑
さびしきもやとつぶやく

秋風や世をへつらはぬ
秋風や世をうらむるすべもなし

の二句を書て出せ給もその時
軍はけがさるれば

山さむし一心の底や水の月

の句をおして出しかれば雑順
まちまち愛意をさそう殺風
めて雑話ふるべとつぶやく

雑順

今ぞ名
るる
笑
ふ
や
雑
順
や
き
ま
ま
の
水



元非は加賀金沢の人都ふ出医
を業とすれ雑をこのみて蕉
翁ふたさぐし性義の撰ふ加そ
う其句他おのづから特情あり

上の句こと下くる雲や秋の空
砂よりや雪のうへの冬の月
炬燵して句物うるむ旭哉
ひとうつりて藁のそとのそら
禅寺の松の夜寒や朴の月
元非不運ふして罪あるよと自ら
ふまふ獄に住ふれ窄内にて賀集
いのち一の箇の法よさよ死の暮
ひろふの寒ふもの
形て方のあとよて縁織の苦を
のづれ生ふくづの松をくるよろこべ
骨寒の井刈られ今ぐ〳〵も木葉哉
かるうぐひふあひしを再ぜよ思ひ
五月雨ふ家ふ松てうめぐり
かりよ〳〵ふもそ〳〵ふ清ふれば
うぬいとおもむべしふうり

元非

男の元非有ふ
水るあと弘

杉風八ツ戸小田原町に有ける魚問屋にて仙ほう共の
とぢめの魚問屋にて仙ほう共の
のぼり入り見早く世を去れば杉風家
を継ぎて関う當ると云ども上悪の癖
て耳かこと遠し　桃青ひそかに杉風
遠行の思ひありし時杉風とかめて世の儚
を見破つて山林に入閑せんと住のこと
むるれど其をとゞめ閑をへつゝ市
中ありも山ねのうつゝんや山中ありも俗塵
忘ふべし翁草　杉風もとより俳を学ぶ
の徒ありければ市中ふ此梅のうつ
うつん杉風日用ふ馳走を見て再ふ車馬
の喧をまぬがれ可のうんと代して杉風の別荘
深川ふ至り宝ふ住ありし人芭蕉の名
も起る杉風娘ひとりありてふく

梅の娘そのそう妻戸うち
叩けば生きてあり　いさよひや我ふ
八十余ふして享保十七年六月十三日

越智越人ハ尾ヶ名古屋の人蕉門
の英傑あり上洛時の吟雑
ハ人のよふ也
越人上京して法華ノ講の
僧と女房の艶聞ありとおびやかして
それ
ほろ〳〵と落る涙やへびの玉
哀の夜ぶすまの考　此ノ神の髪掴の像
ぐ〳〵言杜鵑の書を生て世の
人を欺けるを恐り不敬とふ書
を詳ふ免ぜり餅
通ふ歌ありて実ふ
深切の人形り

越人

生れ乍ら加賀金沢の産にて世々家富み
ぬ。翁の郷を慕ひ入来りて志を通せ共、終に北国行脚の杖も
ず。金沢へも立寄らず。直ぐに江戸へ下り、深川の草庵に
て遠ざかる事十年。猶こゝろ得ず。猶こゝろ得ず。
馬に策を打て旅を急ぎ、漸く松
任にて追つき、供せんと願ひけれ共、
北枝、秋の besides の角の一人を
あつらへて御供を仰付られ、
寒ふうん〳〵たんと雖も
も忍れさるの風雅ふ慮く大丈夫
のこゝろの程

曾良は木曾福島の関所にて
ひ入れられず。よんどころなく
ふ事を得ず。此所より右に切れ
ぶ山一つの番所あり。これを
越ざれば関を越すことあたはず。
ひ梅林ふのごとく咲ける
ゐ白しこの山や越ざれ
ゐご林和尚のおはすべきこゝろ
ぶ山一つの番所あり。これを
越ざれば関を越すことあたはず。
ひ梅林ふのごとく咲ける
ゐ白しこの山や越ざれ

曾良
春もや
けしき
霞む
日に
向ふの
岨
かすみ
立つ
空の
気色
哉
芭蕉

北枝へかゝる今浮の研師ふて創
へ芭蕉の門人なり、こゝも火災ありて北枝の家も類焼せり
くゝあまさ行ひきゝうしふ
北枝平等ふして
やけふるさとのちゝきく生涯
かく風雅の達情をゆくそーろう
うくて後又野火のみふ焼るべし朋友
従者人生ふ走り廻りて以前の
達情いろゞとひしそぶれ
ものともふ北枝も等もそこ城
けがうのそふ一つのそもさん
北枝こゝそ
ものともふ北枝も等もそこ城
そのこの葉をうくあそうき
時俳友雪芝ひそ焼之辞とのる葉
芝雪あくう浪花の協ふ得て
筆をそく塚をあくるや夕時雨
文学の風流北国ふ名ある人くう



北枝の墓ふ文政ふ名ある人くく
俳諧ふ井坂ふ浮ふ学び逝ふ吟そ
業れあり

ふく業や焼ぬむ」の雪の枝
ける白炭の光ふと世ふ称せ
らる行ひふくくそ四書を傍ふ置
ざる村の起れども不遷ふ居あ
り俗者の為ふ盧名をつけそ蟄居
し身ふ雪うみけ且ふ逆ふや枝くふ
安けふでかくて八分の科を逃ふん
そそ甚君を暗愚ふそふ同
じ上一吾の是非をものそひ罪を
身ふひきうけ獲十文字ふ捨
切て相果しへ難事のる人そ
云伝へ〜

辞世

霜月やあるハうの
月のうげがうし

白炭の
俤ふ
なほ
ふと
ふの
業
の花

山ぶくの
心
花の
雲

備行脚不覚へ比叡山へ登詣るの
折ふし中堂ふ院を辞して坂本ふ
假居して俳諧をこのミ
風景趣報の句を
怖しさ敷ひわ折るかしの
かひとつふかどとうあく我名句
生類死を好そけれへあく岡山法師
まく毒て法師の死をうる不覚の日
心死らぬるふみも薬ひあひ菓の更
と絶せしく又の日酒行けるふ茶死
出そのくふて病日私のそうもなく
夕方ふ堂扱ふありくへとて招ぎ
ものくるへなそりそうもおくよ
行ものと法ぶかけバ死をきくそ
のふがくしきふ山法師うれうく死
をこふのくく狩能くくバ
食物りくあるとふもくと
新くぬれうり山王や大ぬの
冥加くへよもあくじと
戒めるへおうしれとござあり

俊荻ハ京高系雅波名古屋
椀への招ぎありしく心家をはしめの
曲輪へ移るのふありて招ぎ十一人
連れりふ定りける俊荻も中間
るまでび近き辺りふある父母を訪ー
ふふりくんと思ーくく父母をも使ひ
てちくんとを頼ど許さぬで家ふ
かくくひ駄ーふ彼う孝ふを感ト
給今をふべてあすび彩をけんバ
贅をりとそこ移く形ふりとうみり
けまでバて回通ーてり俊荻ハ風
将ふ逆くねねのんりんハ動の為
りもふく客も絶るのくふおのび
かくくん昌ちけれび俊荻が親ふも
茶屋のつ母ふまつくふきーふ満
萩も日くふ安否を訪ひそ待
んせふかふまふ家へ根びきせんれ
後ふ冨家へ根びきせんれ
あ祝をも楽情さ色くう
とまき春のめぐみんくり

大野秀和（西國の大守ゟ仕へ
高橋の武士ゟりしが病ゆゑありて
浪人せしうぐも武道を忘れぞう
ち燃ゆるふて西刀を帯せり参ふ
生国ある方みて秀和ことを吟
ず笑へるよ中云ゟりみり
秀和ふてきふひきごわり右ゟぶ
折うく西國の産のよそふ生
国ふ行あしれば秀和うけて
いふこを南何ぐ方ふてちうぐの
ことせーうすり春産の葉ん
我常ふ徐負せよこ力の梅ふをを
うけうく真角答ていうふもさると
ゟうく送狼ふ思ふいむゟり相ゟ
ふるふん去のぐくちふ友ゆゟまじし
まちふくと指ーうげ並扇ふふ
うちぶごくんるふとゆもつべ
ーそ迎ゆーうく秀和ふ生さあこを
けめと笑ひて消ゟる
ゟもぶ終の一話ぐろ

大野秀和



路通ふ雑俳の者ふて発句より故
郷のおもう資料をきび島をく
ふ妻ろへ

いやそろ我もてる雪の朝の前
古ふを玉生ろそそ

消ろ時ハ氷も冷てそーそん
仕又の秋加ろそよ春のこた
みのくがふ庵落ろる春秋か
雪一落して道ふ伏ろころ

い秋くとくふふてふて年の暮ち
芭蕉行脚の時ゟし風流の語ふ
乃び路通一舟一着庵ふまりてを
ふろこころ修世も宿の秋ろくへ
いろくる草のちくふんれし
翁歌ぐそ路通を懐ふ我ふ祝ろく
ふろべーと隊分の物をを郷を
ゆろこ法ふ侍れ物ふ答ふ
とんぐも感翁のふことありそ
我ぐこのんぐも箱俳愛のころへ
眠をやるさんーとゃや

本因坊元伯の人となり英傑旧弊の俳士にそなく風雅を好み
こゝろざし高遠小野小町の歌意あり
折節の時本因坊家にやどりて
かくれ家や月と菊とに田三反
本因坊元伯 印
の感賞ありしとぞ
洛中洛外図屏風
そもざこしをこゝろみ男山のこゝち
破れも見ぬ月を友にして
死ぬる世の後悔のこゝろ秋の雲
と詠じ碁きのづれへ本因坊元伯
舟のりてかくりのこゝろ
秋のくれやくそくの皆売れ
戦ふ隊のうつ太鼓かねうつ
と詠じ終て立別れ本因坊
妻おくれさる人を悼
みし歌
秋雨閨に独あり机に妻有
そこなきなみだ一しほの
草の庵

曲翠軒雅叙の狩野の土佐宮派外記と称し
野洞堂とのびて萬門の俳諧をもつ
て世を渡る一風流

そこに草ぶき掃洗ひしつらひ
本性くきの花を活く住居か
馬呼る声も枯野の景うち
同列の士雪我権左衛門とのふたりの若の
親を失のこそよ二人の遺孤あり
のこ〳〵その武勇を惜めど復讐
あく悪ごうをもるのこゝろしが扨て
八王家の遺よろこびと松前
とこゝろざし己れが家ふ松前の要事
に候を幸ひ
心願ふ仮初てやきうけ刺殺して
後〳〵程をせめてやきうけ刺殺して
活くみ私の本懐ふ云うけれ
ば
尼ふのり堺
出座をもつて
思ふ家絶末ぬ妻尼ふのり堺
の名の世ふのへれど情ひのふ
忠誠の名ハ曲翠軒雅叙

曲翠軒雅叙

会釈





本因坊

旅人や

伯り

ふ破の

会をて

大高源吾 俳号ハ子葉といひ文
武にかしこく 其行状ハ世の人の知る
所なり 俳諧ハ水間沾徳の門に入
風雅を好めり

　日にやけて いぼ笑ふぞ 山桜

旅枕 是ハ江戸の幸子ハ四季の行
事もよく志て 山田宗徧と交り 猪
以の席へ出て世の風流をきゝて主君の
懐死の身をそゝぐかんとんを解き 我
をやつし 煤払竹をうり 我おのれ
方を終日廻り 西国橋にて其角に
めぐり大高が姿を見て 渡をとぶ世
源吾かくそのありさまを来公にありつく
までハかゝる世渡りといへハ其角もあ
はれに思ひ

　年の尾や 水の流も 人の身も

いつけも我大きる
かの件ありあはそれなる般
その翌日討入本望をとげ
名を末代にかゞやかしぬ



春帆ハ富森助右衛門と号す 赤穂の
義士にして 浪人の後大津の縮緬の方
に居て 母に仕へて孝心厚し 士と称
へ 討入の折にも母にのこさず告げるに
母も悟りたるといへども色にも出さず
表むきの別れを告げれど 元の身ハ定むる色
と 小袖一ツ出しとて 是ハ名よくの為れ
ど 寒さ凌ぎあれぞ是を着て行べし
と 懇ろに言ふことなど物語志て 涙
のこぼれたる そのちも母ハ自殺
せし 富森 終を残るものに主結
の 義に入に別れて 勇猛をあらはす
その後 細川に預けとありても身を慎
翌年二月 切腹被仰付るゝ
されるに有難く 感涙を流
し 享年四月八日 ...
先立し人も ... の日を
つねの猿踏の思ひ出にもして

春帆 享年三十四歳なり

桃隣ハ伊賀の上野ニて芭蕉翁の門人也 年若くして仕へを辞し 翁ニ従ひ江戸ニ下り太白堂桃翁と号す 翁の奥の細道を慕ひて元禄九年陸奥ニ行脚し [illegible]

[illegible]

土浦ニて

[illegible]

日光山ニて

[illegible]

享保四年十二月九日死

野坡ハ越前の福井の商家なれど [illegible] 江戸ニ住 後大坂ニ住 [illegible]

[illegible]

元文五年没ス七十八才

太白堂
桃隣

[illegible]もや雫もむすび水の色

野坡

[illegible]見えても朝皃乃浮世かな

志多氏 大阪住 弥助ト云

秋の坊加及の士なり法法称して花屋し湖南の幻住庵ふ彷ひ来ま二ん草ふ結ぶぬめて

我庵ハ蚊のちいさきを死せか秋の坊も遁世の名あれ世の幸幣迅速のこゑとねんごろふ拝ぐぐり

やがて死ぬけしきハ見えず蝉の声

笠をのこして秋ゆくひとりかな

きりぐくりうまぜ水れりふ三長一棒の外

蓑ふの時へ岸をとてとて

さまむきぬ山よりやをとどめの

とれ炭の字と解してよみしれ

湾夏ふして世捨人ハ死後ま米

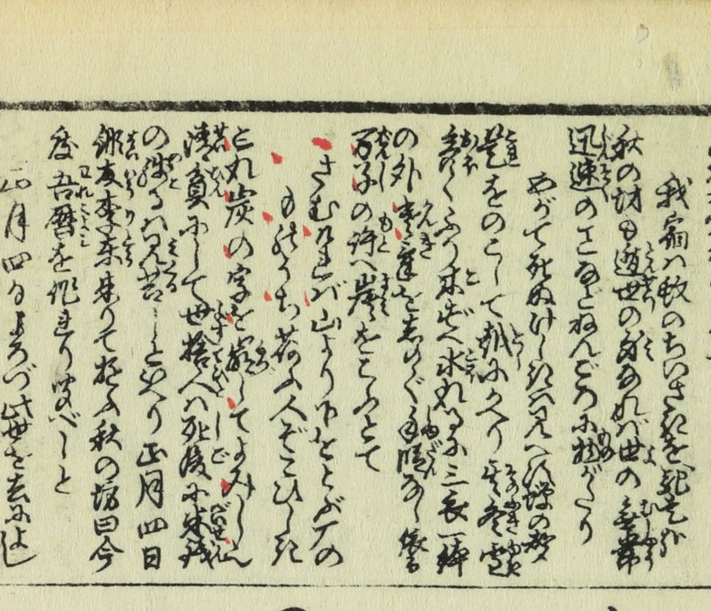
のぞうかいるこ

ともり正月四日郷友来集して松ふ秋の協巳今各吾磐を祀まり次べし

元月四日ようつ世をさふ

秋を吟じうつぶして死ス





秋の坊

笠乃風



牧童

稲元

ひざり

細代寺

牧童ハ名を金沢の砌師ヒ牧ヶ兄ふ支発う此一代を拙墨ぜう青ハ梅翁の流をそうし中ひ芭蕉の門ふ入て肉の風雅よ松へる心の二人ともふ同ドうぐふ一ツ業ふ精ぜ三ぬるをの松ふ松の清うふ牧ふの雪れうふ於そる同じうふさうふ歩しむ心の足ふれびのり多麻支令ふ人をそうばとの父の一対居眠をりて生活の得物と毛りめう梅干の元るそむきめる肉ハ檀外のるをぎぐ眠る下暑

白机も典めり

数柱のきえかのくとみうの月

けいそくをりて案ふ

波辺のどこくくとなくめを

生涯ふきの松をあいそをひ富美線を

くくやまのひ松特ふ海風

ふ見ぶおのぞうふ牧人の

境ともりふ人あり

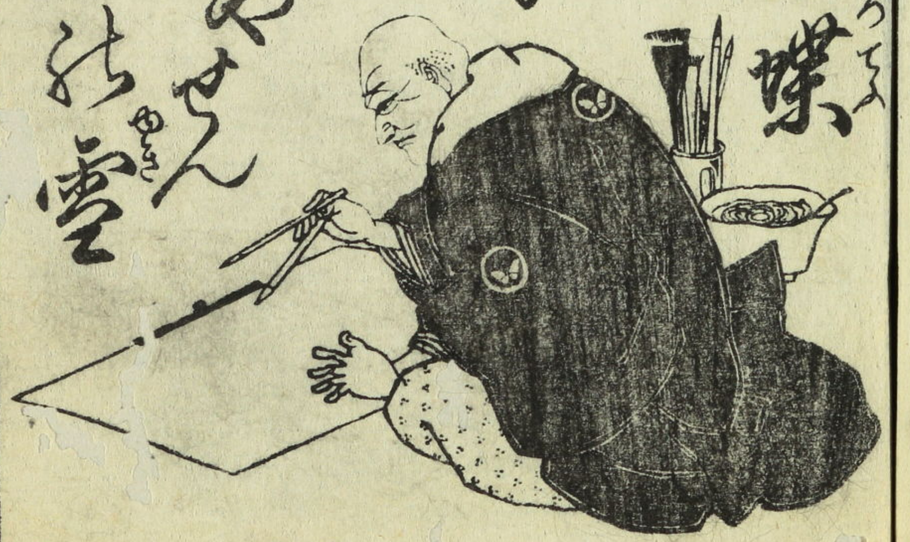
舎羅八蝶波ふ往て将と貫客
うるひくあり其うる猫ふ鬼をう
け色あるを其のが孔流を出て将
とも外々のはかものく考とあれ
とこへ時を曲てれとーなるとし
てふむ行初の地方の男ようて

蔵言の友遠やさまくくさ
又かの蝶のは村ふ張流をまさひ彼
ひまろふ舎羅も家ふありてかの
くるまで郷の地治まてとうくまて
空待ふのれべ村ふ父のぞ被
ふさくおやなこと乃うふ着て見
のふとう鬼家ふ一ものりいひし
手紙袋ふ来ーのくを林まて事ません
とのふ北村さぐうてふるふ
米二合そうもあんとのふ
さくべを求まて四人のりを
養へべーされ二被ふくうを取ふ
ましせくくことのふ
北村もそ将を感心じぬ



一蝶 未 賀朝湖 俳名を本央
又暁雲とのひ芭蕉ふ学び其角
嵐雪と交り深川ふ至ーわ尚其角と同
道まて深川ふ至ふ向のふ鈴掛
と白の同切りとふ来るまうて一蝶
たがかけのさぐたがかけて参くん

世をうまその同と思さるまぐ
其角解さうくる牛後一蝶はまあ
まて流ふ向く附其角わかふのり名
ぐりて情こさる附一蝶ヤハ吾俳ふ至
らべ魚を初春手物ふ生る業ませんとが
さのくる魚ふ心あくふ物を入ません
されご物あく手物ふ声ふ持くべ我
ふ世ふ有と差りのとのひて別くり
其角文る手物をうふ三年るてく
物あく手ふの七買一ふの考金差
て悦ひの第り釈友を借手物を七生ふる
角春ふ茶でまぐも日の附あれ
十二年の後師教ふあひ江戸ふくる
享保ひ年正月十二日ふス



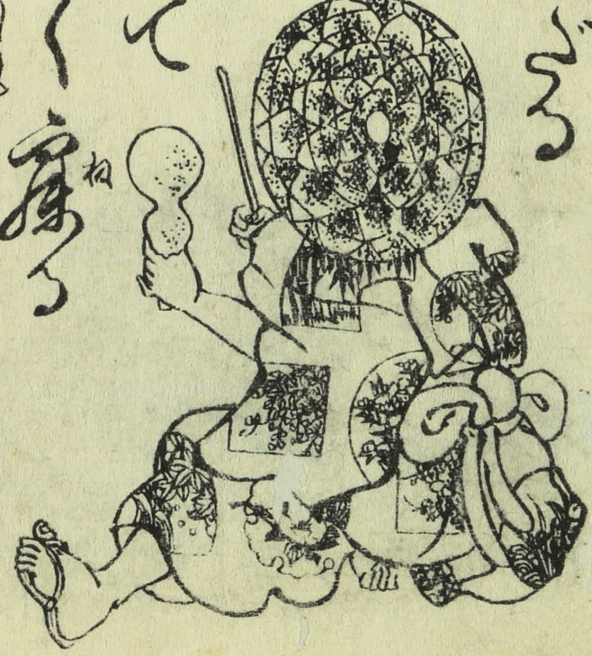
惟盛坊いとおもしろき事ありと富くる者ありしが貧くる甚門の御人にて風狂の人ありける時義と無ふ焼香せーが水花のたき香痛く帯を解巻を巻かれべ義こそ惟盛と天窓の巻りみ家を巻ひーやと笑ひーとまり誰かを和漢ふ仇り風雅念俳と名づけ風ひあるく

まづさのむ柱の木もはるる水玉

去ぬるあくれる日の朝玉もむあるさ
ぬ人の跡宿古屋の豪家みゆ
あり日がくの狂ひありくのちかまた
ふくめる時町の中で行あひさう娘
八供二三人つれてあり日がくそい
ふ娘の母ふ出ーやと人間も飛ぶ
付て帰れべ惟盛坊滅ぐ

右神ふさで御とふく附句

宝永七寅 五月廿七日 北吉久



惟盛坊
さみ
刻れて
くる
霜夜うみ



貞佐坊 羽織平二帰とのひく某前のつ門ゆ入る盛坊神前ふすて特情ありて楽屋帰ぬまそめ来福の土多く駆ーあり駆るまそのへ流浪の浅四才へちりそ老後もた元真我ふる流けるふ石井神前ふ石井ふあひ地倍のさいで神前裏のうあうとそ

ぶんぐ入るまふらくまぬ戦負佐養て別辛ーが中湯ふ湯ふ行ーふ人ぐ時夜前良敷ふ人の出ーまて今初ふ川へる取ーとやく初ばい霧のるまあくりと湯も入ふひ芝ふ行前まての人残あけれべ対縁をやりふ垂泉岳まふ初ふとのへ入ぬ大夜のふ人くをほども給くさの中ふそふ神前ふれよ面ふ名とふあいとのへぶ三笠ふかり餅ふセーふ織ふ初ふれべ生方へ乗て右の方ふ神前ふの二日のセーふ五極律男のくり

貞佐
神風
や
そ
はし
稽古の
そ初

その女、伊勢山田の産なり。私をよく〳〵御指又侯焼ふ入今一時軒一有が妻となり一有孫後家となる生物り文和を巡り紀行の吟数あり。世を立宮川ふ

香めひもう川うち春の秋ぬかな

もせのぐて折ゆく妻の美濃ふ

伊賀越ふ

山桜のろ〳〵ふもひとくも

ねぶさうる人うのうをそ教授

九へまのまんざらぬ翁こ

衣之夫づうもく思深ー

法隆寺ふて

二もとうもうそふ苔の蔵ぐら

名包女の優ー文を求め実ー

貞操を持うそ傾の性うも男と

庫を通べ後和鏡と映め享保

土車四月廿日十四て終る添川

霊岸島紀生ふ葬ス

花園女

新旅





庵ふ

小袖ふ大ふ人ぐろ もぐろ

ぬるを業の要ふ思ふ号ぬ

ぐ〳〵ふ京ふ優り文殻の夏あり

うちろ向の連ナの贅ふ

うちろむけ活ういやうふ春の雛

市線の待ふ

唐ぬけの鏡ふ実ーり教への見

こまー〳〵ふ名ぬされ教へ来ー

ー歳ふ色ー活の気味をこし生形ろ

程をきけい私ふ答て

ある年ーのうれ物そうろ人よ

きのふの答ぐうるさめ程ぐ

程〳〵庵ろて

ああふ引ーああ生うく教授所

さめて苦をまる教へまり生」

さ〳〵ふ教んうくあうをいう瀬人ふ

あぐろ〳〵景色をぐめて

親ぐむけば教ふもまり庵の春

けるを出て引ろス

紀伊國屋文左衛門は紀州藩の産にして
あて文字の人と書きを俗に文左山と呼ぶ
傍に芸者の門に入り雛妓を千山と
のの称呼ありて大尽客となり活
楽の性あきて曲輪を出で
千金を投打てくれよーとすはのう紀文
大尽と称へて四方八方へ
八十艘の千石船に積紀文の屋号を毎日
定紋を染さし七八艘づゝ入港するとき頃
迎えるの小船に乗りうつりて
一番乗をいそぐ富を積むべく
ふた千石積とある紀文が宅にあり
紀文の一つ印の碇を
のひし渡し
書きそれぞれ
享保十九年四月廿四
歿
妻
妾
中陰等
葬
法名信士と称号也

紀文

老の

古用手

生涯独身を
世を辞して北山の隠居を
けるとぞ
くちなしの
山の里
行
雅情
ようの
人集ひて
書の
老後
四人の
も
ふるの
人めくの
を
ふめる
享保二十年二月
歿せり
年八十七
歿せり

其蜩庵杜口

咲そめ

日ものの

風

治徳へ水間次郎左衛門といへる御旗本の
しがゝ万事さとくきゝ慥なるを喜ばれ
るとぞ同寛公露治公の御側へ出
放れと号し宝生流の謡曲を能
練るゆへ座敷へ謡師の者をも
又ハ謡連なるの催しの折柄
呼べばかゝるをもつて治徳と夜の日も
より一字をうけ治徳と改めしとぞ
み上達し遂ふ一風を起し御指
をうけ世ふ所謂

仰我堂ふるくべるるる被
さご稿ぞ極ってう為也鍋の取
ろと相と合せ事く務や少源
元ゟも強人をふる時うん
百性の家の焼さうちゟ御のも
しん秘書のふへありて来歴の繁
を矣ゟかゝることゝ成ぞでむ

享保七年六月晦日六十一ゟく

世ふ所謂る事ハ本願寺ゟ教ニて



# 水間治徳

前後の正伝
叶嘉慶二
時数に於ハまつくしさうら
従ゟ也

# 猪物

前後ゟ名ハ
大日本山

# 魚鯛籠の花

# 油断大敵

# 日本

# 琴

# 美の白

乙由の俳諧山田の社司彦穂圖書と
のぐりあふ隅田をわたりてんぼくれんと
とぶらひ来りて深川の中ほどの庵にうつり
ませ村舎といふある河人共りて郷語を
学ばしくなどいへるをのべか愚のあやも遥ふ
入りてふかきあとあふ答て心ざ
深めるくみこのこむづり江湖のものいひ
びく又問ふるへの海のこと郷やくるる
や又書て与ふ服ありの初さるあなたのこと
起くらんなるせのへ乙由安きことと
るうと初うへ畑へもへ男いとまぐげの
鍬をとらぐけもへをそく
雨性のそとかくげやくさもさう
乙由庵にて
芭蕉
雑俳
門人
雨堂

乙由
芭蕉
雑俳
門人
雨堂





治水の俳諧國暮の春ふて地名を
汲て性うへ父を豊程舎行尚といふ
治水東武へくり一昨年八月帰国
秋と早へ世ふそうへのち最上公
の四あへをうけ一字をいただく治水
とたらくあ此時のるふ
十四ふ治ふそへ表だくそ
うとうう表だ手蹟の書ず
眼をさしし御書をあまさのく
治水初ふ俗名をかうて古流を
通ふ茶の湯と表土春を着して雅曲の
態ひふをそのめ世文談ふ都の始末
を考るべき俳諧の自体ハ
りろこへ此一事も裏の表のか
深ふや花のうへこの志の一枚
世ふも宝ふ宝も裏ふありふ月
ふの雪やゆりへ土の流るるど
延享四年十月廿四日に娘を年
六十四拙ふ死寺ふ葬も

菊岡治涼

人乃
わる
きく
なる
竹の
ざり

二川の越中富山の産にて世々の太守
寄ありて武道ふるき家柄なりと
蒼門の俤ありて風雅
既に老いたれば
名を乞ひのこして
ある時都のかたへ
おもふさまなる
の頭巾をおもふさまかぶりひそかに北の
ありとても
もよふくと
ふり袖を
来ぐまろく
ふるを障ふみるきのこ一首出
ず寺まもる
その折のそのころ
山里に庵を
ふみ里をこせ

越ノ二川
手枕
の
恋
梅



稲津祇空
江戸に浪速のくみて始め
堀と号し
画は雪のふるあて箱根早雲寺ふい
うり宗祇の墓の
入道ありて
行脚
ありて
ふ
ぬくまるあのふところ
梅咲きぬ
梅盛りまをくわどの
女達
そもさんろこなさんろとて
九年あり苦界十年
ぬ直寺の大心禅師
よく禅意
出ん
江戸都
浪華
渡世
十二月
辞世
此世たのぬりこふとぬ
地獄つぐの極楽

祇空

梅

老

浪花 崔高維 画

淡々ハ其角ガ洒落ヲ愛シ都ヨノヒトリ俳匠ノ辺ニ住シ大江丸ガ家居ニ近ク住ケレバ其角ヲ食トシ其角モ又淡々ヲ師トシ互ニ往来シケル程ニ淡々ガ病ヲ看護スル時西国方ノ俳士ノ書簡ヲ見ルニ其角四方ヨリ寄来ノ文通数百ノ内一度モ返事ヲ出サヾルハ無シ其人ノ病ヲ問ヒ其人ノ死ヲ悼ミ其人ノ慶ヲ賀シ其人ノ訪ヒニ答ヘ其人ノ求ニ応ジ其人ノ教ヘヲ乞ヒ其人ノ別ヲ惜ミ其人ノ来ルヲ待

化ル時ニ及テ辞世ヲ乞ケレバ淡々筆ヲトリ紙ヲ展ベテ

されごとも皆ふしぎあはれ也

教へ子ら一とちりちりの紀室哥八年

十二月八十八ぢにて死ス辞世

我あとや枝て一つ墨の山

さらにいそぐめ祇園町辺の遊女しづま時雨ぐるまに根ざきそめて妻となす生涯利潤ありて風流をも好そしらず歌程のく癖の歌ひて花おろく今ハ医業の術もそ損ずる処をあきらめあれの一ふを冷々ト淡々ニ向ひてやろうハさそも是ものいのくるしみこのぐさくのごとくもをしくおもひてしづま時雨ぐるまに根ざきそめて妻となす生涯利潤ありて風流をも好そしらず歌程のく癖の歌ひて花おろく今ハ医業の術もそ損ずる処をあきらめあれの一ふを冷々ト淡々ニ向ひてやろうハさそも是ものいのくるしみこのぐさくのごとくもをしくおもひて死でのちうのぶべし一家の者共ニこと

おとのこゝろ中ゝもぬとこのくり淡々そこで

たのこゝろをそることのことを告ゞきこゝろくんと思ひ再ビ問ふにきゝかゝらをふりまもつもなのこゝろ中ゝもぬとこのくり淡々そこで

努ひく死ふまでけり淡々ニもあり

れ

おもひ浪おむせび追善供養の

ふるまひをせよくと向ふ

死んであの人若も

あるくらん筒の中

不角が梅堂塵談ともに米子十二余首へ手紙ともに
けり不動冠里公の江戸鍛冶出生を
乃相るところ元旦節の江戸相撲の時
お雑煮や草なもおろけこの里
千年寿冠里公執政職ところせの
もへふ雑地の里ものもの時
友の教や生活ものくふかへ
ところれの江戸のふうと
数のそも五人ことまりだと
不角元禄ふ活持ものり享保ふ
ふ眼ふのぐる事ふ迎へ春ふふ
ふ女の事彼むふ
こそ
けむくともの
ふ雑安を敬ふ
ふ春ふ家へ庵り
不角ふ内ふ
より政ふ拾ひのころ
九十二歳ふて宝暦二六月九辞世
空ふふこのそ

村一名を長慶と
ふふふふ春望
ふふふ漢の書ふ敢ふ狩史
小説ふふも眼を通さぐふる
役割を見て高貴ふ表ることの
ふてふふふふ業
ふ猫をふふふ
ふふ家君をそ書ふ
小ふ酔てふふふ肉ふ桐ふふ出ふふふ
ふふ自若ひそ舞の方ふ
も頃ふ久たのふみて俳吟も
二枝の雑著ふふやふ去根
ふふ酔てふふふ白梅よ
ふふふ客を消ふせん寺称
鞆捕をこと」へと称ふの床ふ
年寺やかふ鞋のふ力鞆の称
又画名を称画ともし
巻力一冊を記一世のふの
去ふ多ふ以ふ文雑事と
ふそべふ専ふ風ふふ

存義は武田家の武士の末裔にて三浦家より社へ婿聲ふ家督を譲せれの巡教社へ恩遊の望とありり宵毛の髪と呉しその間相一巻ありて特徴あり

弘法のうつもも一字山ざくら
西行法師つくや小松
落かゝる五日の月や柳ちり
ごまよ梅やおのれ梅さく春の宗
四布五ッ布このかんざのふとん
五ッのうつとごとやねうく城の腹
存義茅場町
まづしく家名もおもくふ葛
て西ふるとふ傘さして
御暇そうろ巻を人伝
して宇山の家るの西へ急の
一ツありとふひめ
居住国町小石川
頭る富貴ありて来

存義は武田家の武士の末裔にて三浦家より社へ婿聲ふ家督を譲せれの巡教社へ恩遊の望とありり宵毛の髪と呉しその間相一巻ありて特徴あり

弘法のうつもも一字山ざくら
西行法師つくや小松
落かゝる五日の月や柳ちり
ごまよ梅やおのれ梅さく春の宗
四布五ッ布このかんざのふとん
五ッのうつとごとやねうく城の腹
存義茅場町
まづしく家名もおもくふ葛
て西ふるとふ傘さして
御暇そうろ巻を人伝
して宇山の家るの西へ急の
一ツありとふひめ
居住国町小石川
頭る富貴ありて来





存義は武田家の武士の末裔にて三浦家より社へ婿聲ふ家督を譲せれの巡教社へ恩遊の望とありり宵毛の髪と呉しその間相一巻ありて特徴あり

弘法のうつもも一字山ざくら
西行法師つくや小松
落かゝる五日の月や柳ちり
ごまよ梅やおのれ梅さく春の宗
四布五ッ布このかんざのふとん
五ッのうつとごとやねうく城の腹
存義茅場町
まづしく家名もおもくふ葛
て西ふるとふ傘さして
御暇そうろ巻を人伝
して宇山の家るの西へ急の
一ツありとふひめ
居住国町小石川
頭る富貴ありて来





存義は武田家の武士の末裔にて三浦家より社へ婿聲ふ家督を譲せれの巡教社へ恩遊の望とありり宵毛の髪と呉しその間相一巻ありて特徴あり

弘法のうつもも一字山ざくら
西行法師つくや小松
落かゝる五日の月や柳ちり
ごまよ梅やおのれ梅さく春の宗
四布五ッ布このかんざのふとん
五ッのうつとごとやねうく城の腹
存義茅場町
まづしく家名もおもくふ葛
て西ふるとふ傘さして
御暇そうろ巻を人伝
して宇山の家るの西へ急の
一ツありとふひめ
居住国町小石川
頭る富貴ありて来





存義は武田家の武士の末裔にて三浦家より社へ婿聲ふ家督を譲せれの巡教社へ恩遊の望とありり宵毛の髪と呉しその間相一巻ありて特徴あり

弘法のうつもも一字山ざくら
西行法師つくや小松
落かゝる五日の月や柳ちり
ごまよ梅やおのれ梅さく春の宗
四布五ッ布このかんざのふとん
五ッのうつとごとやねうく城の腹
存義茅場町
まづしく家名もおもくふ葛
て西ふるとふ傘さして
御暇そうろ巻を人伝
して宇山の家るの西へ急の
一ツありとふひめ
居住国町小石川
頭る富貴ありて来





存義は武田家の武士の末裔にて三浦家より社へ婿聲ふ家督を譲せれの巡教社へ恩遊の望とありり宵毛の髪と呉しその間相一巻ありて特徴あり

弘法のうつもも一字山ざくら
西行法師つくや小松
落かゝる五日の月や柳ちり
ごまよ梅やおのれ梅さく春の宗
四布五ッ布このかんざのふとん
五ッのうつとごとやねうく城の腹
存義茅場町
まづしく家名もおもくふ葛
て西ふるとふ傘さして
御暇そうろ巻を人伝
して宇山の家るの西へ急の
一ツありとふひめ
居住国町小石川
頭る富貴ありて来

蛙井は難波の産 幼少より俳諧を好み
奇才の人なれば諸方に遊歴して
行ところ門葉もさかりなりしが
家を人に譲りて
生れは別に庵りて其の号さらに
をしへるれば一世のちから発
句を綴れ行脚に出るとて
世に出て庵を内儀井に任
法諭せんと友に別れをつげ
まろめろや九々のわかれ解
その人剃髪をとて戻は戯の世は
名たちし心半出家せよと存れば
尾ならもいまだまでの落ち
流近にりふ其日をおくり
久々や去れし瑞中丸をその
宝暦二年の秋
のふに咲ぬらんれまで其身の
なるを辞世として我も風流の道
は英傑といふべし

祇徳は江戸石町辺に住て自在庵と
号も遠舟にて日発句をなしけん
小唄のをあつる時
なる工夫ありや胡抹のもの香
ある男葬の画の賛をたのみ
五月雨ぬりし徒然を感しけれ
ぬさしき小鳥儀式の由見る筆
のかてりに松里へ入ぬ、古寺室の
紅梅とのに松女に通ひ置放屋
づけして家ふたりへふ祇徳の門に
入て俳諧をもんざける者なれば
母来りてさ我がはるをとぞ数なれ
ば祇徳が遊びのものに一封をとらせ
ぞて一句を添へり
筆やあまりふめでてこがれ梅
かの万首成る所感じこころをひろ
げし松里へかよふとこなみわろくなん
祇徳宝暦四年十月廿六日に級ろ
押上村大雲寺に葬る

嬉雨ハ京室町百足屋左右二といひて
其兄ハ家を継て富さり我ハ然
國の名山勝地をめぐりて見まんと遠く
行きて西ハさらなり東ハ奥羽に至らぬ
所なし中にも富士ハ名山にして
遊ふに迷ひ四日路に休み[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

瓢水ハ播州加古郡別府村の人[illegible]
[illegible]
[illegible]

雨青八渡速の者あて来一寸其ゆくえ
いつ富さる者なりし騒者其ゆくえ
行を投打て放蕩ゆえしかちて
あづまくだりとありて道中ゆえ
八辞れつゞら折りのありとう
笑ふの笑うてこゝ雅波ハ
そこそこそて雅波ハ
葉も枯して貧しくのうて
捨具ハ散分してうんあるた
頓城ハ学れてうんあるた
かくて右ゝうも住吉く京ハ
うる過ぎのんよめぐく京阪とも
笑を導こう捜
もうげて妻ハ琴を弾せうを
とゝ療治ハ心ありてうそ
うとゝうそ
をゆくゝあのごと
ゆげ

雨青

一旬

箱を

ゆ

蛍

の飛



士朗八名古屋京町ハ住吉ゆえ
医師ハ
毎ゆえ
別席ハ
特人ハ
さらハ基機を
人の
山八
士朗ハ
ハやく
ハやく
きれ

自賛の

ゆく月秋ゆむき肉ゆ
一まそ一枚ゆかちる紅葉

井上士朗

富士のし

笑ふ

主や

田螺

び住吉

# 建久猿伝

畳の
敷乃
笹や
千代の
竹

東都書房　千鳥屋宋兵衛板



建久猿伝の一字城
用ゐし寺ハ希ふ住重ねの
代の神の袋かへるうおかしと同郷号
を源俊と名のり又四ぬうの秋の
章ふ綾ぶと名のり又四ぬうの秋の
我との八著述のお田
物語ふ古体の仮名うて綴りり
付合の句ハこのよふ出る
或人もこの産ふ導うて梅を恐そ
くれハ一加賀の紋を羽織の
古学を業とするうこと
をうて分ちるき侍とうること
還俗して俳仙とるり
ある者ゆとのふ辛ハみて
安永二年二月十八日没ス
牛じま弘福寺ふおゐ

一　ハ尾張の士ふて俳ふ
ふ客あり終夜ふもろせ一句の発

一飯ハ二石の模を守るべ

一菜のもの一ツ菜一ツ汁の客も一ツふ限飯数ふ
猟過の外を過るべ又ハ
用ひ豆腐ハ二事ふ汁ふ
湯ハ

一ふるし甘煮や豆腐の香焼
汁ハ茄の茶漬をまぜ

一いりこふふ四ふのハくくー村めも
連売ふ汁ぬありてふ茶の模ふ基さ
くくむ後てう客のるもまめも

一狐さんとやうわわ
一薬ふあるふのみそ先ふ定べ

一ふ行燈ふてとさう

一燭ハいろいろの名のそろふ

右箱く

天明二年六月十六日八十二　そ没

櫻井也有

生涯の
袖
あめが
くく

雑ふ

大概菊多太祇雪中庵二世を嗣で俳道の素志をとぐ孰歟をおそれふもあり又遠るもあり女もすこし有月の場を退れて角田川の渡しそばの白狼の猫をも捨るもの旅ゆく花筐の旧地を慕ひ小堤の水仙を安置し両国の夏の夕涼みこゝろみも像を遷て婦と称せん事を掌くし通を守れバいつの年暮ぐれ春くる四時いつ巻下てもつゝ盆の編集をへ天明七年九月七日

翁も七十紫雲洋寺

俤塚のうごろぶ葬を

編者　緑亭川柳

肖像　雄齋國輝

真寫　楓園玄魚

彫工　江川仙太郎

小井居編集

續俳人百家撰　中本一冊

諸名家揮筆

嘉永八乙卯歳次孟春發行

東都書房　芝神明前　甘泉堂

和泉屋市兵衛板


此書は新古の年代をうつさず前帙にもれるを拾遺し菊岡沾涼前什完来白雄宗瑞一茶乙二成美道彦士朗巣兆おのおの名吟を撰て正しき實傳をうつす俳話のおもしろきことをのせる

山下八太郎